

ああ、我が日の出る国 ー チェコ文学におけるジャポニスム ー

1890年、パリのエコール・デ・ボザールで「日本の巨匠展」が開かれた。この展覧会開催にあたって設置された委員会には、ヨーロッパで日本美術を広めた、ジャポニスムの鍵とも言える人物の名が連なっている。当時の美術通がこぞって通ったメゾン・ド・ラルル・ヌーヴォーの店主で美術誌『芸術の日本』(1888年～1891年)を発行した美術商人のサミュエル・ビング。ゴッホを初めヨーロッパ美術界の人々と知識人に日本の美術品を紹介した。他には



『日本の巨匠展』ポスター、ジュール・シエレ、1890年

ジャポニスムという用語を作った美術評論家のフィリップ・ビュルティ。現在のフランスで最も権威ある文学賞の一つのゴンクール賞を設立し、作家で美術品収集家のエドモン・ド・ゴンクール。そして、1892年からエコール・デ・ボザールの最高顧問の一人となる美術史家のルイ・ゴンスだ。なぜ、フランス国内で初めて日本の美術品を扱った展覧会でもない「日本の巨匠展」に注目するののかと言うと、ヨーロッパ美術界での日本美術の地位を決定的なものにし、社会現象にまで押し上げたからだ。まず、「日本の巨匠展」委員会は展覧会名に「巨匠」の言葉を入れた。当時は、過去の作品から学ぶことが何よりも重要とされ、過去の巨匠こそ最高の師だと教えられていたから、よく知られていない異文化に巨匠の賛辞を送る敬意こそ、それまでのヨーロッパでは考えられないことだった。おりしも会場に選ばれたのは、ヨーロッパの美術の伝統を謳い、美の学府として最高峰の一つと自負するエコール・デ・ボザールだ。ヨーロッパ美術界に影響力を持つこれらの人物が、どれほどの思いを持って開催に挑んだかが良く分かる。展覧会名だけでもパリの人々は興味を持ち、不思議がった。しかし、会場で、観客はさらなる驚きと緊張に包まれた。飾られた作品は左右非対称、作品名にある対象物であるべきものの全体が描かれていないどころか、絵の中心にさえない。いや、描かれてさえいないものもある。ヨーロッパで何世紀にも渡ってユマニスムから受け継がれた合理的思想に基づく従来の美意識では、対象物全体を描き、中心軸から左右対称に均整が取れた美を良しとしていた。それをまっこうから否定する日本美術こそがエコール・デ・ボザールの求める新しい美術で、ヨーロッパ美術界の今後の方向性の指針だと、来場者は驚嘆した。ヨーロッパ社会は、対象物が見えないことがかえって想像を掻き立てて素晴らしいと「日本の巨匠展」を絶賛した。ヨーロッパの美の模範が大きく変わった革命的な瞬間だ。

しかし、このような劇的な変化は社会から大きな反発を招いても可笑しくなかった。なぜ、人々は熱狂的に受け入れたのだろうか。この答えを見つけるには、複雑に絡み合う、ヨーロッパの社会史と思想の歴史を紐解こう。



『水道橋駿河台』

歌川広重、名所江戸百景、1857年

ヨーロッパとヨーロッパ以外の文化圏との繋がりは古いが、未知との遭遇という意味ではルネサンスにクリストファー・コロンブスが新世界を発見するのを待たなければいけない。ヨーロッパ中がアメリカ大陸発見のニュースに沸き返った。さらに地球球体説や地動説などの科学的発見がなされると、従来の宗教観への疑問が生じ、反宗教主義が噴出する。宗教と深く結びついた社会体制への批判へと進んだのは、自然な流れだろう。今まで信じてきたことが覆されたショックは大きく、全てを見直さなければいけないと、ギリシャやローマなどの古典学問の再検証が盛んに行われた。この傾向はそのまま啓蒙思想に引き継がれ、フランス革命へと向かわせ、実証主義の危機と、産業革命の行き過ぎを問題視する20世紀へと繋がる。この一連の社会批判と古典時代への回帰と同時に育まれたのは、文明に穢されていない異文化に純粹さを見るユートピア的幻想だ。この幻想は何世紀

にも渡ってヨーロッパを魅了し続けた。今展覧会、「ミュンヘンと日本、日本とオールド展」の時代、19世紀後半から20世紀初期とは、産業革命で力を付けた市民の台頭と民主主義への変換という不安定な時代だ。内省が流行り、カントの世界認識からショーペンハウアーの意思と表象の関係が発表され、それらがニーチェの混沌に与えた重要性、そして代替の必要性へと形を変えていった。文学と芸術では、外面の描写から精神面を表現した題材が好まれた。ロマン主義から内省やオカルトなどの怪奇現象に魅せられたデカダン派が発生し、象徴派は夢や精神性を多種多様な形で描いた。ユートピア的幻想がここにも頭をもたげる。ゴーギャンがプリミティビズムを追求し、ブルターニュ、それからポリネシアに渡ったのもこの時期だ。特別に裕福でなくても世界中に行けるようになり、様々な紀行文が発表された。海外から持ち帰った物や写真の展示会も多く開かれた。欧州にいながらにして異文化の擬似体験ができるようになると、ヨーロッパ的思想を支えてきた2本の柱、神学と理性主義の絶対性は、異文化という他者との比較の中で、またもや根本から揺らぎだす。社会不安はそれだけではない。今まで社会で注目されてこなかった市民階級が急速に力を得たものの、社会での新しい役割に困惑していた。王政から民主主義へと変化していく中、今まで世界の中心で当たり前だった対象は外され、全く別の階級、市民が大役を担わなくてはならなくなった。この民主主義体制を良いものとして民衆は切望したが、同時に想像できる範囲を超えてもいた。知識人はどの様な世の中にしていくべきか、様々な討論を交わし、人々はなにか歪んだものの中に存在しているような漠然とした不安に心を焦らせた。彼らが訪れた「日本の巨匠展」で目にした浮世絵は、遠く離れた国、日本のものでありながら、自分たちを映し出す鏡だった。例えば広重の『名所江戸百景 水道橋駿河台』¹だ。題

¹ 歌川広重、『水道橋駿河台』、1857年、名所江戸百景より

に反し、絵の中心より少し左端だが、大きく描かれているのは鯉幟で、肝心の水道橋と家々の屋根は背景に少し描かれているだけだ。これは、ヨーロッパ的感覚からすると、まったくもって奇妙で落ち着かない印象を与える。けれども、その不自然な鯉幟こそ、自分たち市民ではないか。

16世紀にルイス・フロイスが民族学観点から日本を観察したときには、日本の何もかもがヨーロッパとは正反対だと紹介された²。それから3世紀経った19世紀の雑誌『芸術の日本』は、「軽薄な一時期の流行の我々に惑わされることはなく、今や、この芸術(日本美術、著者注)は我々の芸術と深く結びついて朽ちることはない。一滴の血が我々の血に混じり、世界の何をして、もう、我々から取り除くことは出来ない」³と断言した。

ヨーロッパのジャポニスムは美術だけでは終わらなかった。文学や音楽にも広がった。ここでは、今展覧会のテーマから、チェコ文学における二人の作家の日本からの影響を考察したい。⁴まず、初めに1884年に出版された『権八と小紫』とその作者、ユリウス・ゼイエルが挙げられる。この小説はチェコ文学におけるジャポニスム初期の作品で、初めて日本を題材にした小説だ。長い間、日本文化を知る良書と考えられた。もう一人はチェコスロバキア軍団として1918年から1919年まで来日し、自身の体験を元に小説を書いたオールドジフ・ゼメクだ。なぜチェコスロバキア軍団が日本に滞在したのか、彼等の稀有な運命は後ほど説明したい。ゼメクの小説、『お雪さん』は、一見、すでに使い古されたピエール・ロティ風の紀行だが、欧米の列強国内部の民族の多様性、その複雑な関係を背景に、これらの国々が日本へ向けた当時の眼差しの一つを知る手掛かりだ。

ジャポニスム初期におけるチェコ文学の中の日本：

ユリウス・ゼイエルの『権八と小紫』

ユリウス・ゼイエルは、1841年、フランス人の父とチェコ人の母との間にプラハで生まれた。散文を得意とした新ロマン主義の執筆家で、詩人、劇作家としても活躍し、ボヘミア象徴主義、デカダン派を確立した。ゼイエルの代表作となった『沈む星の家 (Dům u utonulého slunce)』(1894年初版)は、神秘主義的な雰囲気の中で、キリスト教徒と異教徒の緊張した関係を描いている。興味深いのは、ゼイエルが評価されたのは文学だけではなく、美術への造詣も深かった。ゼイエルの審美眼はチェコの上流階級では大いに信頼されており、彼らの美術品収集の依頼を受けたゼイエルはヨーロッパ各地に足を運んだ。しかし、ヨーロッパに飽き足らず、更なる多文化交流と新境地を求めたゼイエルは、ロシア、トルコ、チュニジアにまで足を延ばした。ゼイエルの作品にはゲルマン民族やローマ帝国、スラブ民族の神話や伝説からインスピレーションを得たものや、中世ヨーロッパ、そしてインド、エジプト、イラン、中国、日本などの東洋を題

² Luís Fróis, *Européens & Japonais : Traité sur les contradictions & différences de mœurs*, Paris, Chandeigne, 1993.

³ Samuel Bing, “Programme”, *Le Japon artistique*, n° 1, 1888, p. 9.

⁴ 第二次世界大戦以前のチェコ文学における日本の影響の研究: Karel Fiala, “First Contacts of Czechs and Slovaks with Japanese Culture (Up to World War I): The Major Publications and Personalities”, *Japan Review*, n° 3, 1992, p. 45-71.

材にしたものがある。翻訳も含めた執筆作品数は40作以上にもなり、ゼイエル作品から影響を受けた芸術分野は多い。チェコを代表する作曲家のヨゼフ・スークやレオシュ・ヤナーチェクも、ゼイエル作品を基に曲を書いた。

ゼイエルと日本美術との出会いは、当時、パリで有名だったサミュエル・ビングのメゾン・ド・ラル・ヌーヴォーだっただろう。パリで日本美術が大人気になった19世紀後半に、何度もメゾン・ド・ラル・ヌーヴォーに通っている。その後、チェコ随一の慈善家と言われた富豪のヴォイチェフ・ナープルステク夫妻が日本の美術品を収集するにあたり、全責任をゼイエルに一任する。これにより、ゼイエルは日本文化研究により一層の力を注いだ。このゼイエルが作り上げた膨大な日本美術のコレクションは、チェコでも他に類を見ない大きさとなり、プラハ市立ナープルステク美術館設立の基盤となった⁵。これをきっかけに、チェコで一大人気を博した旅行家のエンリケ・スタンコ・ヴラース(1896年来日⁶)など他の著名人も、挙ってゼイエルに浮世絵の購入を依頼した。ヴォイチェフ・ナープルステクの死後、ゼイエルはナープルステク美術館の永久学芸員に任命される。



「ユリウス・ゼイエル」
フランティシェク・ジェニーシェク、
1883年、ヤン・ヴォボルニーク著書
『ユリウス・ゼイエル伝』(Julius Zeyer,
Prague, Unie, 1907)から

ゼイエル文学と日本

日本美術との結びつきが深く、新ロマン主義作家のゼイエルが日本を題材にした作品を書いたのは、ごく、自然なことだろう。これはチェコ文学界において初めての試みで、彼の作品のどれもが膨大な資料と研究に裏づけられた。ゼイエルは短編小説『柔らかな夜の歌』の主人公に小野小町を選び、古事記の日本神話から『イザナギ神の大きな苦しみについて』と『ある夜、イダリアの家で』を書いた。狂言の古典作品の『石神』から影響を受けて、戯曲『愛の奇跡』を執筆した後、1884年に出版された『権八と小紫 (Gompači a Komurasaki)』を発表した。ゼイエルが日本を題材にした作品の中でも、『権八と小紫』は、1884年に初版⁷されてから第二次大戦後までの半世紀以上もの間、小説という枠を超えて日本文化を知る良書としてチェコスロバキアで読み継がれた。これらの日本情緒に溢れる作品は、日本美術を通して得た知識だけではなく、ナープル

⁵ ナープルステク美術館(現在は国立美術館)の浮世絵の所蔵作品数は約7000枚。プラハ・ナショナルギャラリーの浮世絵所蔵数は3600枚。プラハ以外の主要都市では、ブルノのモラビアギャラリーの370枚、プルゼニウの西ボヘミア美術館の340枚が最も多い。参照：Markéta Hánová, *Japanese Woodblock prints and their Collectors in the Czech Lands*, Prague, National Gallery, 2019, p. 10.

⁶ 参照：Jana Jiroušková, Lukáš Pecha ed., *Sběratel Julius Zeyer*, Praha, Národní muzeum, 2008.

⁷ Julius Zeyer, *Gompači a Komurasaki*, Praha, Eduard Valečka, 1884; “Píseň za vlahé noci”, *Lumír*, 1885, n° 1, p. 5-10; “O velkém bolu boha Izanagi”, *Lumír*, 1891, n° 32, p. 373-374; “Večer u Idalie. Hrška tradic, legend a pohádek z nejkrásnějšího východu”, in Julius Zeyer, *Stratonika a jiné povídky*, Praha, Bursík a Kohout, 1892, p. 243-398; “Lásky div”, *Květy*, n° 11, 1888, p. 505-520.

ステク氏の本棚から拝借した本や、ゼイエル自身が買い求めた本を参考にして書かれた。ゼイエルが参考にした本の著者は実際に日本に滞在した欧米人の政治家や日本文化研究者だったが、ゼイエルは来日することはなかった。間接的に日本を研究したのみだ。ゼイエル作品には漆や日本彫刻、装飾品など、日本を象徴する小道具が多く登場し、様々な描写がヨーロッパ的な東洋趣味の延長で書かれている⁸。これは、ゼイエルが直接触れることができたのは日本の美術品や骨董品だったことと、日本と日本人に関しては他者の著書でしか知り得なかったことに起因するだろう。例えば『権八と小紫』の茶屋だ。茶屋では女中が「透き通った磁器に注がれた酒」を美しい扇に乗せて差し出し、店の奥には城を模った竹細工の籠が置かれている。籠には花が敷き詰められて蝶が舞い、長旅に疲れた客を喜ばす。この客は貴族ばかりで、豪華絢爛な宴会、芝居や音楽、舞、花の品評会を開き、和歌を競い合う。無論、ヨーロッパから見た「伝統的かつ正当な日本」だ。弥次喜多道中に出てくるような素朴な茶屋からは程遠く、欧州の都市近郊の田舎に特別に建てられた異国情緒溢れる高級サロン・ド・テだと言った方がまだ分かる。特に日本文化を前面に押し出そうとした時、小道具は日本でも、それらの見せ方は至極ヨーロッパ的だ。「権八は全ての本当の日本人と同じく花を愛した⁹」し、放たれた矢は人を傷つける武器のはずが「優雅な蜻蛉」のように飛び、人を感嘆させる。「軍旗は朝の薄暗闇の中を漂うようにはためき」「それは太陽に照らされて茜色に染まった雲のよう」だった。¹⁰ デカダン派特有の酔わせるような詩的な表現が続く。しかし、これも仕方がないことなのかもしれない。この『権八と小紫』が出版された1884年にデカダン派は成熟期を迎えるのだから。この年、ゼイエルと親交の深かったエレミール・ブールジュが『神々の黄昏』を、ユイスマンスが『さかしま』を発表すると、この2作品を持ってデカダン派は完成したと、フランス文学界は褒め称えた。

『権八と小紫』

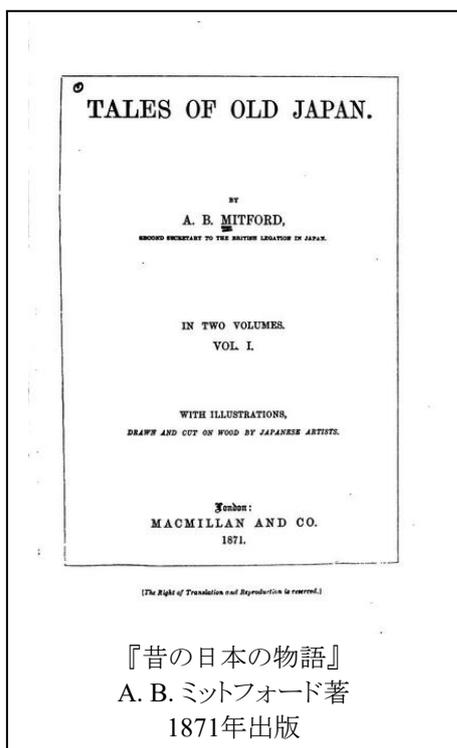
『権八と小紫』の前書きによると、ゼイエルは明治初期に来日していたイギリスの外交官、アルジャーノン・バートラム・フリーマン＝ミットフォードの『昔の日本の物語』(*Tales of Old Japan*)の『権八と小紫』¹¹を参考にしてしている。また、同書の『佐倉の霊』(*The Ghost of Sakura*)から、下総佐倉藩領主、掘田の重税に苦しむ農民のために將軍へ直訴し処刑された名主、佐倉惣五郎の義民伝説を『権八と小紫』に書き加えた。ミットフォード版から日本人の宗教観や儀式、美術観を学び、周囲の人々に尊敬される権

⁸ ゼイエルが参考にしたとされる著書例： Aimé Humbert, *Le Japon illustré*, tome I, Paris, Librairie Hachette, 1870; Julius Klaproth ed., *Nippon o dai itsi ran, ou Annales des Empereurs du Japon*, Paris, London, The Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1834; August Pfizmayer, *Die Theogonie der Japaner*, Wien, 1864; August Pfizmayer, *Die Auslegungen zu den Nachrichten von den Söhnen des Gottes I-za-nagi*, Österreich, 1865; Léon Rosny, *Anthologie Japonaise, Poésies anciennes et modernes*, Paris, Maisonneuve et Cie, 1871. 参照： Antonín Líman, “The Autenticity of Japanese Themes in Julius Zeyer’s Work”, in Karel Fiala et al., *The Japanese Traditional Thought and the Present*, Prague, Univerzita Karlova, Ústav dálného východu, Japan Center in Prague, 1996, p. 108-132; 原文は英語だがチェコ語で発表されたテキストは：“Japonské motivy v díle Julia Zeyera”, in Antonín Líman, *Kouzlo šerosvitu*, Praha, DharmaGaia, Česko-japonská společnost, 2008, p. 229-256.

⁹ Julius Zeyer, *Gompači a Komurasaki*, Praha, Eduard Valečka, 1884, p. 16.

¹⁰ *Idem.*, p. 15, 66.

¹¹ Algernon Bertram Freeman-Mitford Redesdale, *Tales of Old Japan*, London, Macmillan and Co., 1871.



八の人格と正義感の詳しい描写、また、権八の顔の傷跡などを引き継いだ。ミットフォードの『権八と小紫』の基となったのは、歌舞伎や狂言、浄瑠璃でも「権八小紫物」と呼ばれて大いに流行った一連の作品群だ。「権八小紫物」の主題はモラルを破綻させるほどまでの狂うような権八の愛と小紫の死と引き換えに守る忠誠心だが、ゼイエル『権八と小紫』の一貫としたテーマは出世欲だ。その他にも、日本の話では権八が辻斬りをしたり泥棒家業に手を染めるのに対して、ゼイエル版の権八にそのような要素は一切出てこない違いがある。キリスト教的倫理観からだろうか。

ゼイエルの『権八と小紫』は、一人の女が真夜中の神社の境内で樹に藁人形を釘で打ちつける場面、丑の刻参りから始まる。女は権八の領主、堀田の妻、ナデシコだ。なぜ、高貴な女性が呪詛をかけるほどに心を乱したか。話を読み進めよう。ナデシコは堀田の妻でありながら権八と恋仲にあった。しかし、ナデシコが堀田に権八を取り立てるよ

うに進言したにもかかわらず、出世した権八はナデシコとの関係が堀田に知られることを恐れて、逃げるように江戸へ発ってしまう。原作では父親を馬鹿にした人を殺めたために江戸に身を隠すのだが、ゼイエルの権八は、その美貌から高貴な位にある婦人の気を引くことで出世していき、出世するためには人との約束をも反故する男として書かれている。江戸に着く前に山中で権八が盗賊の罠にかかる場面は、フリーマン＝ミットフォード版を参考に行っている。泊めてもらった家の主が盗賊だと疑うこともなく寝入った権八だが、同じく偶然に泊まっていた小紫が盗賊の会話を盗み聞きして事なきを得る。もう一人、盗賊に捕らえられていた男を権八は助ける。「権八小紫物」やフリーマン＝ミットフォード版に出てくるもう一人の男性登場人物と言えば町人の幡随院長兵衛だが、ゼイエル版では江戸城大番頭の岡田という設定だ。その後、岡田の江戸の自宅に招待された権八は、そこで岡田の素性を知る。確たる仕事がないものの腕の立つ権八を、岡田は江戸城の護衛に雇う。ゼイエル版では、上京したばかりの権八は真面目で、物腰もしっかりしており、岡田は自分の娘を嫁がせようとまで考える。しかし、急に現れて岡田のお気に入りになった権八は、以前から岡田に仕える侍たちの妬みの的だった。中には悪い噂を立てようと、権八を吉原に連れ出すものもいた。吉原がどんな場所かも知らずに付いて行った権八は、そこで小紫に再会する。それと同じ時期、江戸城で働く娘、「ホタル」は秘密の逢瀬に急ぐところを権八に見付かり、とっさに権八を慕って探していたのだと嘘をつく。この嘘に気がついた権八の同僚のムバラは、岡田の権八への信頼をさらに失墜させようと、「ホタル」を利用することを考え付く。ここでも悪の根源は男の出世欲だ。江戸城で短歌の会が開かれ、宴会の酒に酔った権八はホタルに城外へと誘い出される。権八は男のエゴが擽られたのか、酔いもあつただろう。疑いもせずにいっしょに行くと、ホタルと権八の偽の婚姻の儀式が用意されていた。誓詞奏上が始まった途端、ホタルと侍女は短剣を持って権

八に襲い掛かる。全てはムバラの罠だった。この劇的な場面は、緊張感を持って読み手の心に迫り、恐ろしいながらも美しい。罠にかかった権八は秘密の場所に監禁され、無実の罪を着せられる。監禁される際に負った傷で身体は弱り、輝く美貌に全ての門戸が開かれるだろうと噂された権八の顔には長い傷跡が残った。この出来事で権八は悔い改める。解放された権八は小紫に会いに江戸に戻る。小紫が重税で貧窮した家族を救うために芸者になった経緯を知ると、最後の頼みと岡田に助けを求め、吉原から小紫を身請ける。全てを幕府に申し開き、身の潔白を証明すると誓い、権八は、先ず、小紫を小紫の両親の元へ連れて行く。小紫も権八と同じく佐倉の出だった。一年のうちに將軍の下で名を立てた暁には小紫の元に必ず生きて戻ると約束しながら、小紫の両親の家に着いてみれば、小紫の両親と兄弟は、將軍徳川家に佐倉での重税と農民の貧窮した生活を直訴したかどで処刑されてしまった後だった。江戸での権八の心変わりを聞き知った「ナデシコ」が、堀田に小紫の家族を処刑させたのだ。小紫にも死刑が宣告される。絶望した権八は自らの過ちから生まれた悲劇を終わらせるべく「ナデシコ」を探しだして矢で射る。小説の冒頭の丑の刻参りの呪詛が「ナデシコ」自身に返ったかのような、運命的な場面だ。その後、出頭した権八に理解を示した堀田は、切腹にて自害することを権八に許す。小紫も権八の後を追って自決し、二人は同じ墓に葬られた。これが、ゼイエル版『権八と小紫』の大まかな話だ。フリーマン＝ミットフォード版の描写の幾つかをそのまま残した箇所もある。岩から二筋の水が流れ出る描写や、不動様を奉った寺。その寺にある墓石の一つに比翼の鳥を思わせる文が刻まれ、これから起こる運命を予感させる場面や、籠の中に閉じ込められたかのように格子戸の向こうに煌びやかに着飾られ化粧を施された芸者が座り、路を通るものの視線にさらされる夜の吉原の情景などだ。しかし、ゼイエル作品で特筆すべきことは、その饒舌さだろう。芸者の「華輝」、「金剛流」、「桜林」などの名前が、名前の意味が薄れてしまった欧米ではエキゾチックな美しさを醸し出し、芸者特有の髪型、豪華な簪や着物の説明は、さながら極東のアラビアンナイトの世界だ。神秘主義と呼応し、原始的な恐ろしさを掻き立てる丑の刻参り。涙を誘う小紫の家族の最後は細部にまで詳しく、日本を知らない読者の脳裏にも、その情景がありありと浮かぶ。自害を許された小紫の兄弟だが、その一人が介添え人に首の右側を負傷しているため左から切るように頼むと、介添え人は良心に張り裂けそうな心を堪えながらこの願いを聞き入れる。切腹の描写も細かい。また、幼いにも拘らず、打ち首にされた末の弟の、まだ小さい頭が転がると、口から飴が幾つも転がり落ちる。父、惣五郎を慕う隣近所のものが選別に与えた飴だった。そして、死を前にしても、なお正しく、誇りを失わない惣五郎と妻の最後の言葉。仲間を思って自らを差し出した惣五郎と惣五郎の妻の威厳ある磔刑は、ヨーロッパの読者にイエスキリストの人柄と最後を彷彿させる。「人生は短しきもの。けれど善処は何世紀にも渡って記憶されましよう。(中略)あな



たさまと御一緒に幸せでございました」と、惣五郎の妻は処刑直前に惣五郎に語る。そして権八と小紫の死。心理描写だけでなく、士農工商など江戸時代の日本社会の構成や社会階級の特徴の説明も多い。これら全ての要素が、ゼイエルの『権八と小紫』は日本文化を正しく伝えるものとして提唱された理由だ。

ゼイエルの『権八と小紫』を読むと、女性の登場人物が大きく二つのタイプに分かれることに気が付く。従順でか弱い人形のようにいて、家族や愛する人のために自己犠牲を厭わない小紫と小紫の母親のような人物像と、対して妖艶で情熱的なナデシコとホタルのような女性たちだ。非ヨーロッパ圏を思う時、ヨーロッパは、良くも悪くも、自分たちを魅了するものとして女性をイメージとして当て嵌めることが多い。雄々しく強いヨーロッパと純情で穢れなき乙女、もしくは男を巧みに誘う女の構図が無意識のうちに表れる。ゼイエルの『権八と小紫』の登場人物は男性も多いが、力強さと存在感から言えば、女性は男性を凌駕する。フリーマン＝ミットフォードが描いた遊女の絶望や、彼女たちが自殺しないように客の太刀を宿の入り口で預からなければならなかった悲しい実情などもゼイエルはそのまま残してはいるが、上記の女性像に人間味を持たせる背景として使われただけだ。

小説の前書きでゼイエルは、フリーマン＝ミットフォードの著書との違いをこう説明する。「尊敬すべき為永（為永春水の『いろは文庫』、訳者注）の『忠臣蔵』という題名の小説を、斎藤という日本人と E. グリー（Edward Greedy、日本美術商、訳者注）とが英訳したが¹²、その本に斎藤が寄せた前書きによるとミットフォードが伝える伝説には日本文学を伝えるものとしての意味はほとんどないそうだが、社会情勢の描写としての価値は認めると言う。私にはこれで十分だ。ミットフォードに詳しく語られた幾つかの出来事を掴み、プラハで見付けられる限りの様々なヨーロッパ言語の翻訳書から私の目的に沿う本を選び、深く掘り下げた日本の研究を始めた。その後、やっと完全なる想像の自由の中で、私はこの小説を書き始めた。」

ゼイエルは日本精神や文化に忠実であるように努力はしたが、それは想像の域を出ない幻のようなもので、自身の文学的想像の世界の産物だと言う。相阿弥のような完全な日本の知識を得られないのならば、相阿弥の茶道について語ったところで読み手に指針を与えることはないとも語る。19世紀のヨーロッパでは、本には社会に指針を与える使命があった。「ところで、私は茶道について書きたいのではないし、かの有名な相阿弥のような卓越した感性も持たずにシンプルな絵を描くことで満足しているが、それは日本美術特有の歪んだ遠近法との唯一の共通点だと言えるだろう¹³。」

出版当時、日本はエキゾチックな舞台設定というだけで、どの国が舞台でも同じように恋愛悲劇小説として成り立つとする、ゼイエルの日本観を否定する声がなかったわけではない。『権八と小紫』の原作だけでなく、日本本来の姿

¹² Shuichiro Saito, "Introduction", in Shunsui Tamenaga, *The Loyal Ronins*, New York, G. P. Putnam's Sons, 1880, p. iv. ゼイエルの戯曲、『愛の奇跡』第四章にはエドワード・グリーの <*The Golden Lotus and Other Legends of Japan*> (Boston, Lee and Sheppard, 1883) を基に書かれた一幕がある。

¹³ Julius Zeyer, *Gompači a Komurasaki*, op. cit., p. 7-8.

ともかけ離れているとも言われた¹⁴。特に作中に出てくる絨毯や宝石などの装飾品が日本のものではないと指摘された。欧州では日本は畳のイメージが強く、絨毯はペルシアを連想させた。絨毯や指輪は、江戸時代の日本にもあることにはあった。珍しいけれども、シルクロードを通じて古くから中近東や中国から日本に伝来していた。鍋島緞通、堺緞通、赤穂緞通など、江戸時代には国産の絨毯も織られていた。ただ、非常に高価で、大名や徳川家など、位の高い人々しか手にすることがなかったことを考えると、絨毯が庶民の家にあったとするゼイエル描写は的確ではない。しかし、これだけでゼイエルのオリエンタリズムを、ヨーロッパ的優越感からくる上辺だけの興味本位のものだと結論付けることは出来ない¹⁵。ゼイエルの『香水』には中近東とアジアを旅した様子が描かれている。現地の人々を子供のような無邪気さとともに人間本来の姿として捉えた。この異邦人への憧れは、あくまでもヨーロッパを汚れた地とする自己批判から生まれている。それらを、文明の発達したヨーロッパを前提とした、他者を見下した態度だとだけに捉えては短絡的だ。『香水』でゼイエルは、こう書いている。「おお、太陽の心躍らせる波動、揺れ動く大気、涼しい日陰、活力が漲る喜び、大きな渇きをもって接する植物の、世界の怠けた夢人を知る幸福なる東の民よ。私たちの白熱する競争は私たちを金を作り出す機械へと変え、努力で頭がぼおとする私たちを見て彼らは言う。「フランク人は死ぬことがないかのように働く」と。この人々を野に咲く百合と比べても、なんの不思議もない。かれらの夢見がちな魂の中には、人類の最も心優しい理想が入り込んでいるのだから。神々の国の理想が。ところが私たちの労働と努力の賜物はなんだろう。資本は万能であるか。コーヒーに舌鼓を打つ彼らを見ながら、不安もなく、静かな真の情熱の香りを嗅ぎ、虚無を蒼味がかった湯気の向こう側に見据え、魂全体で話に耳を傾ける彼らを見て、私は子供のように溜息を付く。ゆったりとした体付きと単純な精神が、どんなに詩のように美しいことか¹⁶。」

『権八と小紫』でも、日本の動物や植物、日本人の自然体でいながら高貴な振る舞いが産業化され退廃した西洋と比較され、日本は神に作られた人間本来の姿に近いものとして紹介される。だからこそ当時の倫理的な批判は、ヨーロッパを舞台にしていたら許されなかつたであろうモラルの欠如と暴力性を正当化する隠れ蓑として日本が使われたのではないかとすることに集中した。ゼイエルの病的な退廃的嗜好を日本の文化として浄化させたのではないか。日本を忠実に描かいていないのではないかと、疑われたのだ。《まえがきに誤りがあることを断言する。この小説に完全に日本的なものはなく、そして教育的ではない。(中略)次の比較は大胆などと言えるような代物ではない。「鼈甲の教え切れないほどの長い針は、我等の聖人のように花魁の頭の周りを輝かせた。」¹⁷》《ゼイエル作品は一冊ごとに違う個性があり、異なる空の下が舞台となり、熱い思いもあるが、各物語の主人公の限度を超えたロマンティズムは、彼らの精神が似通っていることを示している。(中略)この小説では日本の素晴らしい自然が酔わせ

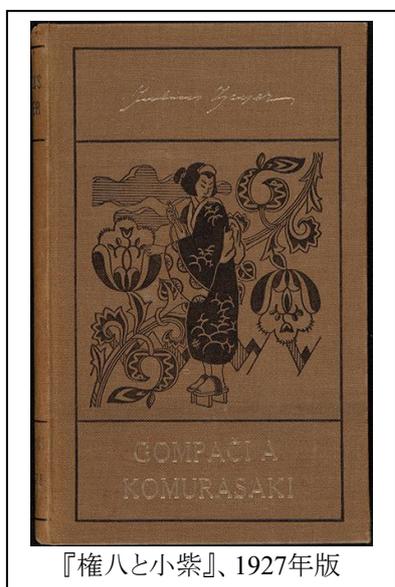
¹⁴ 参照：Jakub Wenzel, *Orientalismus v tvorbě Julia Zeyera*, Univerzita Palackého v Olomouci, Filozofická fakulta, Katedra Bohemistiky, bachelor's thesis, 2014.

¹⁵ 参照：Edward W. Said, *Orientalism*, New York, Pantheon Books, 1978.

¹⁶ Julius Zeyer, “Vůně”, in *Obnovné obrazy*, Praha, J. Otto, 1894, p. 16.

¹⁷ *Knihovna lidu*, Brno, Papežská knihtiskárna benediktinů rajhradských, 1890, p. 28.

るほどに芳香な香りを漂わせ、東洋的に飾られた言葉で補完され、我々のものとは根本的に違う日本の習慣、趣味など、特別な倫理的価値観を伝える。(中略)小説を一貫して語られる考えは倫理的ではある。主人公の愛する人と両親への愛、そして失墜による罪の浄化だ。しかし、その目的に到るために使われた方法は、私たちによれば、明確に反倫理的だ。私たちの倫理観であれば、うら若き女性は恥の中に落ちるよりは死を選ぶだろう(小紫が花魁に身を落としたことについて、筆者注)。そして権八の態度は徳に溢れたものではなく、時にして卑劣だ。日本の倫理観では結果が方法を容認してしまうのか。(中略)唯一つ確信できることは、ここに描かれていることは現実、法や真の世論(日本の。著者注)とは違い、それらは作者の想像にしか過ぎず、装飾的価値は過小化されている。なぜなら、事実や善を破壊するものでも、熟考の後に美しいと評価されているからだ。(中略)雨音のように不慣れな言葉の装飾音と日本の習慣の異質さ、作品の印象、好奇心の跡がそこかしこに付いた全体の雰囲気、それらへの疑問が小説全体の印象として多くの読者に与える影響は避けられない¹⁸⁾。》



『権八と小紫』、1927年版

ここで問題視されているのは、東洋をどう捉えるかと言う問題、時代遅れになりつつあった新ロマン主義調の文体と彼の退廃的な美意識、ゼイエル自身が告白する日本へ行ったことがないための知識の欠如だ。それらの問題を否定することは出来ない。しかし、『権八と小紫』の文学的価値は明白で、このような批判があったにせよ、文学界には大きく迎え入れられた。そして、日本人の精神世界を、全てではないにせよ、正確に描いたとも言えるだろう。上記の批判では東洋の人と自然の関係をゼイエルが理想化し過ぎたことを問題としているが、ゼイエルが「自然は偉大な神父が祝福しようとして彼らの上に大きな手を差し伸べたかのようにだった。自然は偉大で善良だった。¹⁹⁾」と書くとき、キリスト教的な言葉を使用しているものの、神道に表れる日本人の心に驚くほど近い。

井伏鱒二の最後の弟子の一人で、日本文学研究者のアントニン・リーマンがゼイエル作中の日本的な事柄の信憑性を分析した1996年の研究がある。リーマンはゼイエルの日本的思考を感じ取る直感的な能力を認めて、その理由を「数世紀にも渡ってキリスト教文化に組み込まれ、その中で培われてきたものに異論はない。しかし、命、情熱、そして死に対し、異教の単純とも言える直感的な感情に入り込む力は、例え、それが想像の中でのことだとしても、スラヴィアの魂の奥深いところにある渇きから来るのだろう²⁰⁾」と、考えた。この考え方は、キリスト教前の時代から何者にも侵されずに守られてきた「スラヴィアの魂」という異教の記憶が、時間軸や空間の中で不変だとする、不確かな概念の存在を前提としている。スラブ人の心の奥底に異教の心が常に存在し、それと対峙するもの、もしくは異教の心が時として表層に湧き上がることへの抑制としてキリスト教を捉える。なぜ、リーマンは、キリスト教は原始的な宗教を禁じると考えたの

¹⁸⁾ František Bílý, “Nové písemnictví”, *Osvěta*, n° 6, 1885, p. 555-556.

¹⁹⁾ Julius Zeyer, *Gompači a Komurasaki*, *op. cit.*, p. 95.

²⁰⁾ In Antonín Líman, “Japonské motivy v díle Julia Zeyera”, *op. cit.*, p. 256.

か。キリスト教が根付いたヨーロッパでは、ルネッサンス期に古典神話への回帰が盛んに行われたし、聖マリアを取り囲むバロックの小天使の図の原型はビーナスの周りを飛び回る愛のこだま、アモールから来ている。神の使いの大天使ガブリエルはジュピターの使いのマーキュリーに習い、太陽の後光で象徴されるキリスト教の父としての神は、その右手にジュピターのいかずちを持つではないか²¹。ゼイエルは敬虔なキリスト教信者だったし、常にキリスト教文化の中で生活していた。彼が生きた19世紀後半は、キリスト教徒の知識人が、当時、流行したオカルティズムや仏教に惹かれたとしても何の矛盾もない時代だ。²² ユイスマンスもその一人だ。ゼイエルのスラブ人としての家庭的、文化的要素はどうだろうか。父親は、フランスとドイツとの狭間で揺れたアルザス地方の出身のフランス人で、母親はチェコのユダヤ人だった。母親の母語はドイツ語だ。ゼイエルはチェコ語を乳母から学んだ。ゼイエルの両親の共通語はドイツ語だった。宗教においては、ユダヤ系の母親はキリスト教に改宗していて、ゼイエルの家庭環境の基本はキリスト教文化だ。ゼイエルの家庭環境は多文化的で、どこまでスラブ魂を持ち合わせたかには疑問が残る。生まれながらにして多文化環境にあった作家は、当時のチェコには非常に多かった。時代は多少前後するが、フランツ・カフカもそうだったし、そういった多文化の環境で育つことは、オーストリア＝ハンガリー帝国に属していたチェコにおいて、よくあることだった。そして、ゼイエルを含めた19世紀後半のチェコの知識人はボヘミア建国の物語に関心を持ち、ヴィクトル・ユーゴーなどの偉大な海外の作家の本を興味深く読んだ。19世紀のフランス文学を代表するユーゴーも、反聖職者中心主義者であるにも関わらず、神なるものと祈りを信じると明言する。²³ ユーゴーも、また、東洋に惹かれたし²⁴、原始的な宗教観にも関心を寄せていて、『諸世紀の伝説』第3集を『16世紀ルネッサンス。異教』と題した²⁵。

リーマンの指摘で非常に興味深いのは、ゼイエル作品の中でも重要なもう一つの小説、『ヤン マリア・プロイハー²⁶』と『権八と小紫』の比較だ。どちらの作品の男性主人公も情けないくせに理想主義で、夢見がち、男性社会に認められたいと願い、支配的な女性の影響下から抜け出せないと言うのだ。

自分のことはさておき、他人を疑うことを知らない馬鹿正直なところがあるゼイエルの権八は、何人かの女性の権力争いに巻き込まれて、身体的にも、精神的にも参ってしまう弱々しさを持つ。ミットフォード版の『佐倉の霊』では農民の苦悩と惣五郎への厳罰の元凶は佐倉の大名だが、ゼイエルの掘田はナデシコの情熱に振り回される。権八は領主からの命令により自決するが、小紫は自らの意思決定で短刀を胸に突き刺す。

²¹ 参照文献例：Jean Seznec, *La Survivance des dieux antiques. Essai sur le rôle de la tradition mythologique dans l'humanisme et dans l'art de la Renaissance*, Londres, The Warburg Institute, 1940.

²² 参照：Josef Šach, *O náboženském smýšlení Julia Zeyera*, Praha, Česká grafická Unie, 1942.

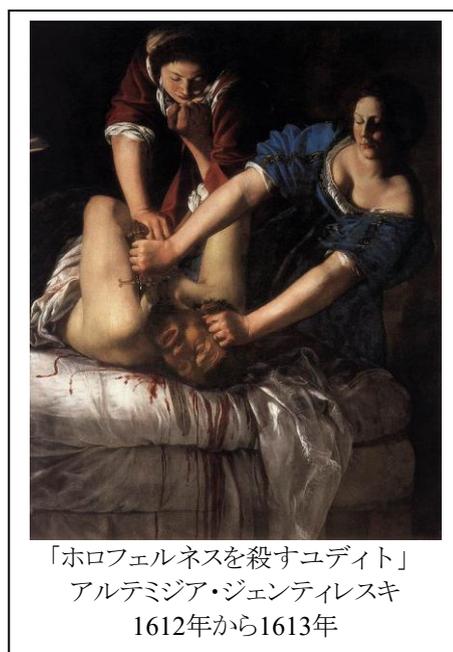
²³ ヴィクトル・ユーゴー、19世紀のフランス文学を代表する詩人、小説家。ユーゴー『秋の木の葉』(*Feuilles d'automne*, Paris, J. Hetzel, 1831年出版)の『全ての人への祈り』(*La prière pour tous*, p. 205-225)では神へ強く語りかけており、1883年8月2日に書かれた友人への手紙では「5万フランを貧しい人たちへ。彼らの霊柩車で墓地に運んでもらうことを願う。どの教会の祈祷も望まない。全ての魂に祈ってもらいたい。私は神を信じる」(*Actes et Paroles, Depuis l'exil, 1881-1885*, Paris, J. Hetzel, 1885, p. 54)では、強い信仰心と同時に、教会への不信感が書かれている。

²⁴ 参照：Victor Hugo, *Les Orientales*, Paris, Charles Gosselin, 1829.

²⁵ Victor Hugo, *La Légende des siècles*, tome II, Paris, Michel Lévy frères, p. 71.

²⁶ Julius Zeyer, *Jan Maria Plojhar*, Praha, J. Otto, 1891.

しかし、活動的な男性登場人物もいる。権八を破滅に導く、腹黒くて残忍なムバラとその仲間だ。雄々しい男性は無情で冷酷だ。男性的なものが少なからず欠如したときにだけ、男性登場人物は良心を持てる。権八を江戸で匿う岡田翁、権八を許す堀田、小紫の伯父の安珍にしかり。小紫の伯父は元気な内は身内の悲劇にも眉毛を微動だにもしないが、小紫の家族や権八と小紫の運命を涙ながらに語ったときには、伯父は目が見えない老人になっていた。ロバート B. ピンセントのゼイエル伝によると、「普段、ゼイエルが語る身の回りの女性と言え、一般的には母か看護婦か、時には姉妹のことを指したが、作品中の女性は理想化された亡霊、キマイラ、強大な精神的影響力を持った人物²⁷」だ。ジェンティレスキのユディットを感嘆するジェラルド・ネルヴァルのように²⁸、デカダンス派を代表する作家のユイスマンスの『さかしま』の主人公、デゼッサントがギュスターヴ・モローのサロメに魅入られたように²⁹、ゼイエルも「運命の女性」のイメージに取り付かれた。リーマンが言及するように、ここには泉鏡花や谷崎潤一郎、川端康成などの日本の作家と近い世界観があり、ゼイエル作品の男性登場人物は弱く、運命を嘆き、太宰治の作品の主人公のように神経が衰弱している。「若死にというロマンチックなテーマと理想化された母性を探求する神経過敏な主人公、これらは伝統的な日本の美的感覚の基本的要素でもあり、当然、ゼイエルの精神世界とこれら日本文学の主人公の内面の符号を語る事が出来る。³⁰」



「ホロフェルネスを殺すユディット」
アルテミジア・ジェンティレスキ
1612年から1613年

もう一つのリーマンの指摘は、ゼイエル作品と日本文学全般に関してだ。源氏物語の宇治十帖から現在に至るまで、日本で主流の美意識の一つに、一つの時代の終焉、世紀末的雰囲気を感じさせるものがあり、それ自体が退廃的だと言う。欧州文学の退廃派の情熱的なノスタルジーの対象の多くは過去のヨーロッパと外国で、時空における「ここ」とは違う世界は変化を予見させ、「ものの憐れ」の概念を思わずにはいられない。

ゼイエルの『権八と小紫』を読んだ西洋の読者は、藩主の妻が夜中に城を抜け出して丑の刻参りをすることに多少の疑念を感じ、また、日本を知るものなら富士山を *Fusiyama* と書いたり、神道を *shintao*、日本を *Nipponari* と表現する不可解な綴りに驚き、そしてヨーロッパの読者の中にはキリスト教的思想に反する要素に眉をしかめる人もいるかもしれない。ゼイエルの他の作品を読んだ人の中には、『権八と小紫』の登場

²⁷ Robert B. Pynsent, *Julius Zeyer, The Path to Decadence*, La Hague, Mouton, 1973, p. 20-21.

²⁸ ジェラルド・ド・ネルヴァルの1834年9月23日付けの父への手紙と1834年10月2日付けの友人ジャン・デュセニョール宛ての手紙より。In *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, p. 1289, p. 1290-1291.

²⁹ Joris-Karl Huysmans, *A rebours*, Paris, Charpentier, 1884, p. 71-79.

³⁰ In Antonín Líman, “Japonské motivy v díle Julia Zeyera”, *op. cit.*, p. 256.

人物は東洋らしき着物を着ているだけで、他の作品の登場人物とさして変わらないように見える人もいるかもしれない。けれども、ゼイエルは異国を舞台にした作品では、日本が一番多く取り上げられていることも確かだ。ゼイエルにとって、日本には何にも変えられない魅力があった。リーマンが指摘するように、「(ゼイエル作品と日本文学の)共通点は19世紀後半のヨーロッパの血流に雪崩打って入り込んできた大量の日本式なものや日本的なテーマ、日本のイメージに直接影響を受けて発生したのではない。これら日本的な魂の中に、詩人は自らを見出し、自身の生まれ故郷よりも自分自身により近いと感じるものがあった」のであり、「もし、これらの死と情熱の狭間で生きる登場人物は、驚くべきことに、日本人作家が書いたとしてもこうだったかもしれないと思えるほど³¹⁾」なのだから。

第二次世界大戦とその後の共産主義政権という政治的な理由で市場から完全に消えてしまうまで、ゼイエルの『権八と小紫』はチェコで大変読まれた作品だ。1884年から1939年までの55年間に8回も重版された。1902年の5月から6月にフランスの彫刻家、オーギュスト・ロダンが彼の彫刻の展示会でプラハに滞在した際、ゼイエルを讃えるイベントに参加している。このイベントの売上はゼイエルの像の制作費に当てられることになっていて、前年に市議会で決議されていた。このイベントではゼイエル作品、『愛の奇跡』の基となった狂言の舞台が上演された。『嵐の中の桜』³²⁾という、やはり日本を舞台にした作品を書いてベストセラー作家となったジョー・フロウハが1906年に来日した際、「あの多くの人が知っているゼイエルの小説の主人公、『権八と小紫』の墓³³⁾」にお参りするのを忘れなかった。

もちろん、これらは良いことばかりでなく、チェコの読者はゼイエルの日本のイメージに囚われたらうし、懐古主義で、当時のジャポニズムを色濃く反映しており、それを良しとしてしまうことで日本の他のイメージや明治以降の日本の発展の許容を難しくした面もあった。日本の「新派劇の父」と呼ばれ、「オッペケペー節」で有名な川上音二郎が、妻の貞奴とその劇団をつれてパリ万博公演をしたその足で1902年に欧州各国を巡業し、プラハ(2月15と17日にドイツ劇場にて)とモラビア地方の都市のブルノ(2月18日に国立劇場にて)でも大成功を収めた時、チェコスロバキアの主要演劇誌は、「物語の日本、ゼイエルの日本がそこにあった。それは、切れ長の目に蒼味がかかった漆黒の髪の上にパリではもう流行遅れになった帽子をかぶり、華奢な体をさらにコルセットで締め付けた、近代化と共にヨーロッパ化された日本ではない³⁴⁾」と評した。1909年に詩人のエマヌエル・レシュヴラドがチェコで初めての日本詩選集を出版した際、『ニッポナリ』³⁵⁾と題したが、これは、ゼイエルの『権八と小紫』のまえがきに登場する造語だ。

「この本で私が描く日本は、(中略)摩訶不思議でいて魅了する日本で、まるで生きているような、それでいて一枚の絵のような、刺繍が施されたガーゼ、地図のような屏風画、扇、金模様の入った漆器、壺、薄く上薬が掛かった焼き物の皿、一言で申し上げ

³¹⁾ *Idem.*, p. 56.

³²⁾ Joe Hloucha, *Sakura ve vichřici*, Praha, J. R. Vilímek, 1905.

³³⁾ Joe Hloucha, “U hrobu Gompači a Komurasaki”, *Český svět*, n° 1, 26. 10. 1906, p. 24-25.

³⁴⁾ “Žaponská divadla”, *Divadelní listy*, 20. 2. 1902, p. 164.

³⁵⁾ Emmanuel Lešehrad, *Nipponari, Ukázky žaponské lyriky*, Praha, 1909.

この本から詩、7作を基にしてボフスラフ・マルチヌが1912年にドビュッシー風の印象派の曲を作った。

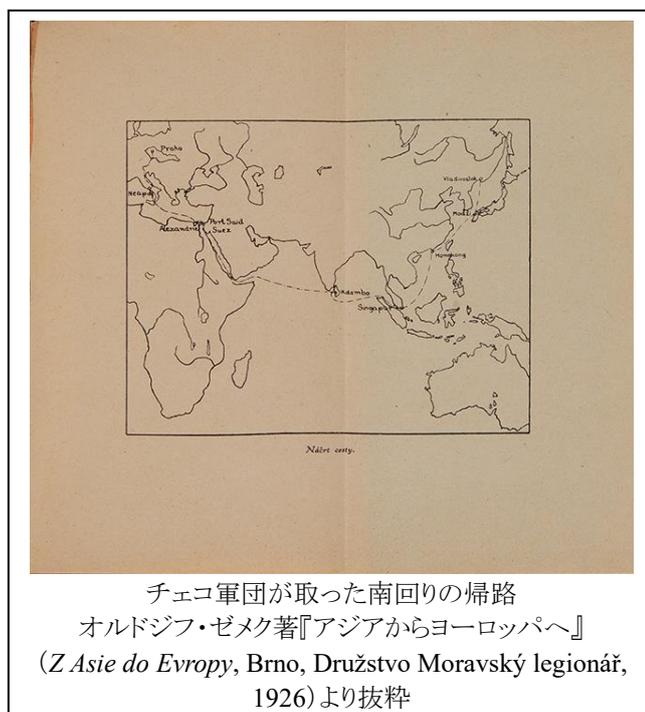
げれば魅惑的な花、優美な鳥、桃がかった紫色の美しい水平線を有する日本で
す。なんと詩的な日本でありましょう。ニッポナリ、日出ずる雄大な帝国!」³⁶
(『権八と小紫』まえがき、ゼイエル著)

ゼイエルは日本を直接知ることはなかったが、チェコにおける日本美術の認知に多く
貢献し、象徴派の若き作家として独特のデカダンの美意識を持って日本社会と大和
魂の特性を伝えた。チェコの芸術分野で初めて日本への扉を大きく開けたゼイエル
は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのチェコ人の日本観の形成に大きく影響し、
現在のチェコ人の中にもその日本観は生き続ける。

『お雪さん』(オールドジフ・ゼメク)： ロティ風文体と紀行文の狭間で

チェコスロバキア軍団

ここで取り上げるもう一人の作家
のオールドジフ・ゼメクは、チェコスロ
バキア軍団として1918年から1919
年まで日本に滞在した。チェコスロ
バキア軍団とは、20世紀初頭にオ
ーストリア＝ハンガリー帝国軍のチ
ェコスロバキアチェコ人兵が帝国
軍を辞めて独自に編成した独立部
隊だ。1914年に第一次世界大戦
が、そして1917年にロシア内戦が
起こった際に、ロシアやフランス、
イタリア、セルビアに派遣されてい
たヨーロッパ各地のチェコ人兵とス
ロバキア人兵が加わった。フラン
ス、イギリス、ロシア帝国の連合軍
側に付き、オーストリア＝ハンガリ
ー帝国およびオスマン帝国、ドイ
ツ、ブルガリア王国の中央同盟国



と対抗した。日本に辿り着くチェコスロバキア軍団は、自ら投降してロシアで捕虜となっ
ていたオーストリア軍のチェコ人、スロバキア人の兵で、1917年にロシア内戦が勃発す
ると、チェコスロバキア軍団として団結して収容所を脱走した。そこにロシア在住のチ
ェコ人とスロバキア人が加わり、第一次世界大戦終戦時のチェコスロバキア軍団総数10
万人のうち、ロシアの軍団は6万人にもなった。ロシア革命後、1918年3月にブレスト＝
リトフスク条約が結ばれてロシア帝国は第一次世界大戦から離脱すると、三国協商国
は銃撃戦に長けたチェコスロバキア軍団をフランス戦線へ送ることにする。しかし、冬

³⁶ Julius Zeyer, *Gompači a Komurasaki*, op. cit., p. 8.

になれば西の行路は凍結し、また、ドイツ軍の存在もあることから、チェコスロバキア軍団はシベリア鉄道を利用してロシアを横断して、ウラジオストクから海路でフランスに行くことに決まった。この作戦でチェコスロバキア軍団は同盟国軍の捕虜兵士100万人が西側戦線強化のために移動するの遅らせ、その間に三国協商側は体制を整えることができた。アメリカ参戦とともに、三国協商を勝利に導いた要因とされている。また、日本がシベリア出兵した際の大義名分は「ロシア革命軍からのチェコスロバキア軍団の救出」だったことから、当時は多くの日本人が注目した出来事だった。トロツキーやコルチャークの権力争いに巻き込まれながら、日本を初めとする第一次世界大戦参加国各国やボルシェビキ、コルチャークなどの思いが交差するロシアの大地を戦闘を交えながら横断していくチェコスロバキア軍団は、今でもヨーロッパで人気のテーマの一つだ。

ゼメクの属したロシアのチェコスロバキア軍団が日本に辿り着くまでを、少し詳しく説明したい。

ロシアのチェコスロバキア軍団が東方へ出立することが決まったとき、ボルシェビキは編成されたばかりの赤軍にチェコスロバキア軍団を取り込む決定を下していた。貴族階級の支配への抵抗という意味でロシア革命を肯定的に捉えてはいたものの、そのやり方を疑問視していたチェコスロバキア軍団はボルシェビキを疑いの目で見ていた。その緊張の時期にチェラビンスク駅で事件が起きる。チェラビンスク駅で数人のチェコ兵とハンガリー兵の喧嘩が起きた。ただの兵士のいざこざにも拘わらず、ボルシェビキは喧嘩した兵士を捕らえてチェコスロバキア軍団に武装解除を迫る。チェコスロバキア軍団はこれに反発し、捕らえられた同士を武力で奪還すると、赤衛隊を武装解除し、市内の武器庫から武器を奪った。すぐに出発したチェコスロバキア軍団はシベリア鉄道沿いの都市を占領しながら東へと進む。途中、赤軍にチェコ人がいれば、故郷の歌を歌って聞かせ、チェコスロバキア軍団で戦おうと誘った。当時の赤軍にいたロシア帝国軍から逃げ出したハンガリーとドイツの脱走兵は、チェコ人とスロバキア人に対する敵対心を隠さず、様々な場所で交戦する。それでも、ロシア内戦の隙を突き、ウラジオストクまでの比較的安全な経路を確保できたのは1918年の5月のことだった。三国協商国はチェコスロバキア軍団の軍事能力に驚くとともに、チェコスロバキア軍団を使って新しいドイツの東戦線を築こうと画策する。そのためにはチェコスロバキア軍団のシベリア撤退を支援する必要がある、また、チェコスロバキア軍団とボルシェビキの衝突があらゆる場所で起こったため、日本軍を主体とした、アメリカ兵、少数のイタリア兵、イギリス兵、殆どベトナム兵のフランス兵がチェコスロバキア軍団救援のためにロシアに派遣された。シベリア出兵だ。ウラジオストクでは日本を含めた協商国が医療機関を設けるなど、支援体制を整えた。1918年9月9日、日本政府はチェコスロバキア軍団にチェコスロバキア国民委員会³⁷の代表の権利を認め、利害一致から、同国を日本の同盟国とすることを宣言する。最終的にチェコスロバキア軍は、主に、2つの帰路を取った。一つはウラジオストクからアメリカに渡り、さらにアメリカを横断して大西洋を通過して帰る路。もう一つは日本、香港、セイロンを経由し、スエズ運河を通る路だ。チェコスロバキア軍

³⁷ チェコスロバキア国民委員会：パリに設立されたオーストリア＝ハンガリー帝国への抵抗組織。1917年12月からはチェコスロバキア軍団設立の全責任を担い、1918年19月18日、チェコスロバキア独立国建国を成功に導いた。

団の活躍がきっかけとなり、三国協商国がチェコスロバキア建国の後押しをしたことで、1918年、10月28日、チェコスロバキアはハンガリー＝オーストリア帝国から独立し、建国を宣言する。チェコスロバキア軍団全員の出発を確認した最後の兵士が祖国の土を踏んだのは1921年³⁸。建国から、ほぼ、2年が経っていた。

その戦闘能力からロシア国内で最強とまで言われたチェコスロバキア軍団だが、経済的にも文化的にも他の軍とは違っていた。まず、シベリア横断中も新聞を発行している。ウラジオストクでは新聞だけでなく、幾つかの資金源を得たことから独自の病院、衣服や薬品、食品などの工場を経営し、ウラジオストクでは珍しかった郵便サービス貯蓄銀行を運営し、交響楽団を2つ抱え、軍団の兵士のみならず一般市民のために頻繁に演劇の舞台を上演した。元チェコスロバキア軍団兵の中には、この特殊な体験を小説に書いたり、日記を出版したりした者がいて、オールドジフ・ゼメクもその一人だ。

オールドジフ・ゼメク

地元の村役場の農林水産課で働いていたゼメクは、第一次世界大戦が始まるとオーストリア＝ハンガリー帝国軍に徴集される。1915年3月にロシアで捕虜になり、1917年にチェコスロバキア軍団に入団。ロシア横断中に病気に罹ったゼメクは日本で1918年10月頃から4ヶ月間療養した後、1919年1月にイギリス船に乗り、海路でアジアを経由しヨーロッパに戻った。

先述のゼイエルと違い、ゼメクは文学的には評価されずに、何冊か出版しただけで文学界から消えてしまった。紀行、短編小説、戯曲と、様々な形式で書いてはいるが、いつも同じ様な自伝的内容だ。現在ではチェコの日本通がゼメクの日本紀行を知っているのみだろう³⁹。それなのになぜ、この作家を紹介するかと言うと、それは時代の証人だからだ。20世紀初頭に日本を訪れた欧米人は、外交官やビジネスマン、旅行家を除けば、それ程多くはない。チェコスロバキア軍団は軍人ではあるが、中級・下級層の出身で、彼らの日記や出版物は一般の人々がどのように日本を感じていたかが書かれた貴重な資料の一つだ。



「オールドジフ・ゼメク」
F. S. フラブシャ著『私たちの時代の
チェコの作家』(Čeští spisovatelé
dnešní doby, Prague, Lidová tribuna,
1923, LXVII.)から

ゼメクと『お雪さん』

1923年にゼメクが『お雪さん』⁴⁰を出版すると、当時の書評は厳しいものだった。「オールドジフ・ゼメクの『お雪さん』は学校の作文だろうか。(中略)才能と通常呼ばれるもの

³⁸ シベリア出兵の日本側の見解についての参照文献：麻田雅文著、『シベリア出兵 - 近代日本の忘れられた七年戦争』、東京、中央公論新社、2016年出版

³⁹ Oldřich Zemek, *Světovým požárem*, Praha, Ústřední legionakladatelství, 1929; *Z Asie do Evropy*, Brno, Moravský legionář, 1926; *Srdce Nipponu*, Kroměříž, 1924; *Sestra Jaeko*, Brno, A. Piša, 1933.

⁴⁰ Oldřich Zemek, *O Juki San*, Opava, Slezská Grafia, 1923.

を無力と不完全さ、過失とで永久に薄め続けたかのようだ。その内容の薄さときたら、ゼメクの日本は(中略)紙に描かれた模様のようなもので、連載小説の一話分もないだろう。」⁴¹

ここでは『お雪さん』を文学的観点からだけでなく、歴史的、社会史的観点から見たい。チェコ人が見た1904年の日露戦争後から第一次世界大戦終戦間際の日本は、どのようなものだったのだろうか。



『お菊さん』、ピエール・ロティ著、チェコ語訳 (Vaněk a Votava, Praha, 1919)、表紙はオタカル・シュターフルによるもの

話の荒筋はこうだ。主人公は病気に罹ったチェコスロバキア軍団の二人の兵士、イジとカレルだ。ウラジオストクから津軽に運ばれ、そこから東京の聖路加国際病院に収容される。そこで働く日本人看護婦、イジは雪と、カレルは菊と、恋をする。しかし、カレルはロシア人看護婦に惹かれるようになり、菊に別れを告げると、菊は短剣で自分の胸を突く。菊とは反対に、雪は日本人と結婚することを決める。失意のイジはヨーロッパに帰国する舟に乗るが、シンガポールで結核のため客死する。

この作品には文学における二人の先駆者の影が見え隠れする⁴²。一人目は前述のユリウス・ゼイエルだ。『お雪さん』では、「ゼイエルの権人の英雄的な愛と美しい小紫の小説」⁴³を読んだことを、ロシアを離れるときにイジが思い出しており、実際にゼメクは日本滞在中に目黒にある権人と小紫の墓参りをしている。ゼイエルとは違い、ゼメクは実際に日本には行った。けれどもゼイエルと違って日本文化について研究しなかったし、美術にも

詳しくなかった。美文を書く力もなく、日本文化の知識もなかった彼が参考にしたのは、フランス人作家のピエール・ロティだった。イジもロティの『お菊さん』⁴⁴を読み、空想と夢の日本を追い求める。『お雪さん』出版にあたり、読者を日本版千一夜の世界へ導くべく、ペトル・ピシュチェルカ(1887-1963)が19世紀の浮世絵⁴⁵を参考にして挿絵を描いた。ピシュチェルカも、チェコスロヴァキア軍団に所属した元兵士だ。

この作品は新ロマン主義の異国への憧れに影響されて、感情的に言葉で書かれている。ウラジオストクから出発したイジは、夢の中でまで「何千という提灯、素敵な羊飼ひ、

⁴¹ Bartoš Vlček, “Mladá prósa”, *Pramen*, n° 5-6, 1923-1924, p. 276.

⁴² 菊の自殺は、プッチーニの『蝶々夫人』(1904年)の影響だと分かる。1905年にコベント・ガーデンで上演された第3版では、当時の世界的なチェコ人オペラ歌手、エミ・デスティンがエンリコ・カルルーゾと主演した。

⁴³ Oldřich Zemek, *O Juki San*, op. cit., p. 11.

⁴⁴ Pierre Loti, *Madame Chrysanthea*, Paris, Calmann-Lévy, 1888.

⁴⁵ ロティの『お菊さん』に代表される欧米人男性と日本人女性の恋愛小説は、チェコ文学界ではジョー・フロウハの『嵐の中の桜』(*Sakura ve vichřici*, Praha, Josef R. Vilímek, 1906)が大人気を博したことで特別なジャンルを確立した。フロウハの他の著書に『私の「お菊さん」』(*Moje “Pani Chrysanthea”*, Praha, Josef R. Vilímek, 1919)がある。注32、33参照

花の祭りがあるところ」⁴⁶と、日本を夢見て詩を読んだり、日本滞在が秋から冬の間だけでは桜の花も見ることが出来ないと嘆く。軍団の仲間が雪との関係を「お前に似合ってるよ。異国情緒と謎めいたロマンスを求めてきた、その集大成だな」⁴⁷と、呆れるほどだ。日本に着いてから現実と空想の日本の違いに失望したイジは、通行人、喫茶店でくつろぐ人々を手当たり次第に批判する。「若くて肥えた日本人が趣味の悪い洋風の服を着て」巻きタバコを啜えてやがると言い、日本の洋風な絵画を前に「不可能なほどに下手くそ」だと酷評し、ヨーロッパの真似をする日本を「古来の日本への、感性、芸術、そして魂の裏切り」⁴⁸だと憤慨する。とは言え、矛盾するようだが、イジは東京の近代的な美しさに感嘆もしたのだ。自動車と人力車が行き交い、人が溢れる通りに圧倒され、電燈広告のネオンとコンクリートの館が「数千もの色とりどりの提灯で飾られて、豪華で喜びに溢れた組み合わせだ」⁴⁹とも言っている。

ロティ小説のお決まりを踏襲した『お雪さん』でも、日本は女性を通じて語られ、日本女性は美術品のように描写される。女性は蝶で花、桃で小さな人形であり、「雛が轉るような小声で話」し、彼女らの動作を「素晴らしき芸術だ。真の詩だ」⁵⁰と絶賛した。「日本女性がいなければ日本は日本ではない。日本人の気質、美しさ、優しさ、その他全てが物語のような日本は、女性がいるからこそ生まれる。⁵¹」ゼメクの日本女性観は世話をしてくれた何人かの看護婦だけで出来ているが、それは強く批判しないでおう。ロシアでの捕虜生活とシベリアの極寒の中での戦いを耐え忍んだ辛い旅の終結の象徴が、彼女たちだったのだから。例えば戦闘の間にロシア女性と関係を持ったとしても、ゼメクやチェコスロバキア軍団の兵士は、日本人看護婦の存在を祖国に帰国できる希望と重ねて見ていた。それには異国趣味以上のものがあつた。「私や他の仲間の苦しみを取り除いたのは日本女性で(中略)祖国という幸福から遠く離れた悲しみを補ってくれるのです。」⁵²アメリカ人看護婦よりも、いや、どこの看護婦よりも素晴らしく、母親が子供に接するように優しく、何か困っているとすぐに気付くと日本人看護婦は賞賛された。

けれども、賞賛の的の日本女性にせよ、何にせよ、ゼメクの小説には一貫性が少ない。イジはチェコのロティと仲間と呼ばれていい気になっていくせに、ロティの『お菊さん』を読むイジに日本人が感想を求めると、「ロティは悪趣味でいらいらするほど気障だ」と、二度も繰り返す⁵³。看護婦お雪とも、言葉も通じ合わないのに数回会っただけでヨーロッパの母親に結婚の承諾を求めるほど真面目かと思えば、面白そうだからと他の国の女性に惹かれたり、友人に誘われて吉原で芸者遊びをしたりする薄っぺらいところもある。それでいて雪に振られると、ロティの日本女性への偏見を持ち出して、日本女性は結局はお金で物事を決めると嘆く。そして、数ページしか続かないセンチメンタルな場面は、ロティ風に、すぐに淡々とした日本の観察記録に取って代わる。登場人物は富士に登り、鎌倉を観光し、徳川家の霊廟を芝公園に尋ね、所沢に遊びに行

⁴⁶ Oldřich Zemek, *O Juki San*, *op. cit.*, p. 13.

⁴⁷ *Idem.*, p. 119.

⁴⁸ *Idem.*, p. 22, 114, 50.

⁴⁹ *Idem.*, p. 23.

⁵⁰ *Idem.*, p. 188.

⁵¹ *Idem.*, p. 42.

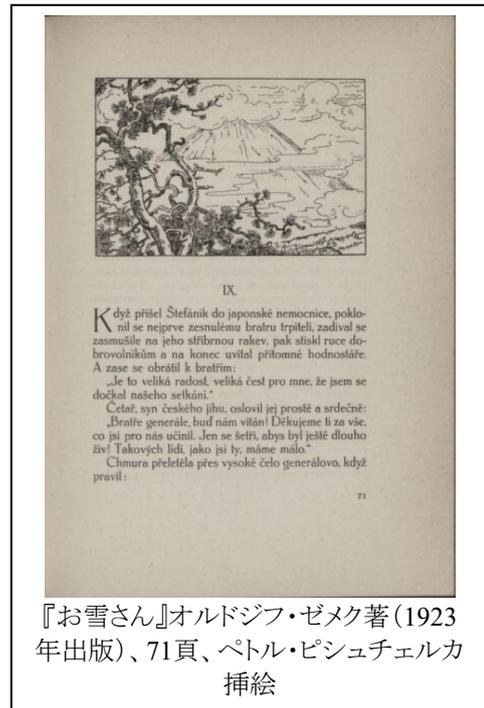
⁵² *Idem.*, p. 43.

⁵³ *Idem.*, p. 28.

き、日比谷公園の花まつりを喜び、江ノ島に出かけ、芸者の舞を楽しみ、観劇し、映画『忠臣蔵』を観る⁵⁴。出版社と読み手を意識しすぎたのか、もはや小説の枠を超えて日本のガイドブックだが、当時の外国人はこんなところに案内されたのだろう。そして、日本文化を知る鍵として獣医の池田が登場する。男性だ。池田はチェコスロバキア軍団に近づいてチェコ語を学ぶと、見る見るうちに上達し、イジと話すだけでなく、イジと他の日本人との通訳を買って出るまでになる。そして、イジは池田を通して古事記や日本の国づくり神話、神功皇后、茶道、日本画の歴史、彫刻職人の左甚五郎、北斎、仏教と神道、政府と農業、七五三に正月（イジは池田の自宅に招かれて正月を過ごした。ゼメクは正月と七五三が同じ日に祝われると書いている）などの説明を受けた。

日本でチェコスロバキア軍団が発行した手書きの新聞、『アノネ』⁵⁵に載ったゼメクのものとは一字一句違えない詩や描写が『お雪さん』に使われていて興味深い。チェコ語の「アノ」は日本語で言う「はい」で、「ネ」は「いいえ」だ。地球の裏側と言えほど故郷と離れた日本で「あのね」という言い回しがよく使われるのを、チェコ人たちは面白がった。気を付けなければ、多少、子供っぽく、もしくは女性的な言い回しになることも知らずに⁵⁶、荒っぽい兵士たちは自分たちの新聞の名前に「アノネ」と付けた。ゼメクは、ウラジオストクから東京に向かう旅の描写などを寄稿している⁵⁷。

ゼメクは本の中で、第一次世界大戦後、横浜で執り行われた「国々のパレード」にかなりのページを割いた。チェコスロバキア軍団も参加したそのパレードで、ゼメクは日本在住のチェコ人と会い、中でも原爆ドームの建築家として有名になるヤン・レツルと出会う⁵⁸。クリスマスには聖路加国際病院で婦人組合がチェコスロバキア軍団のためにバザーを開催した。兵士たちからは手作りのおもちゃや飾り、絵画が売りに出され、



『お雪さん』オルドジフ・ゼメク著(1923年出版)、71頁、ペトル・ピシュチュエルカ挿絵

⁵⁴ ゼメクが観た映画『忠臣蔵』は牧野省三監督の作品と推測される。弁士2名による上映会と記録されている。

⁵⁵ 現存する『Anone』と『Houpačky』の画像を提供して下さった長與進氏に、この場を借りてお礼申し上げます。

⁵⁶ ゼメクと同じく元チェコスロバキア軍団兵で日本に滞在したルドルフ・メデクは著書『世界で一番美しい国に通じる路で』(仮題)で、日本滞在中のガイドとの会話を次のように書き残している。「あのね!(中略)なんだろう/あのね: そうだったのか!」In Rudolf Medek, *Do nejkrásnější země*, Praha, E. K. Rosendorf, 1922, p. 43.

⁵⁷ Oldřich Zemek, “Na vlnách oceánu”, Tokyo, *Anone*, n° 1, 10. 1. 1919, p. 5-6 (裏表両面で1頁と表記されているため、実際には9頁から12頁にあたる) “Z Curugy do Tokia”, Tokyo, *Anone*, n° 4, 31. 1. 1919, p. 3-4 (実際にはページ数が打たれていないため、筆者数え)。

⁵⁸ レツェルについての参考文献: Olga Strusková, *Jan Letzel, Dopisy z Japonska*, Praha, Ivo Železný, 1996.

ゼメクは病院のアメリカ人スタッフに英語にしてもらった自作の詩を印刷して出品した⁵⁹。このバザーのメインイベントは兵士によるモラビア地方（現在のチェコの東部）、ハナーの民族舞踊で、伝統衣装を纏って踊った。「数日発つと日本のチェコスロバキア兵による新聞の特別号が出た。《時事》の記事の冒頭部分に〈このバザーの売上は（中略）すでに分配済み。兄弟よ、一番良き方法で、価値あるものを買うように。何年経った後でも、世界を巻き込んだ嵐が、私たちをこの地に送り込んだことを思い出せるように⁶⁰〉と書いてあったと、『お雪さん』にある。ゼメクはチェコの天文学者のラティスラフ・シュテファーニクが来日した際に、チェコスロバキア軍団が療養する病院に見舞いに来た際のことも書いている。シュテファーニクはチェコスロバキア建国に奔走した中心人物の一人だ。新チェコスロバキア政府の要人としてシベリアに残るチェコスロバキア軍団を安全に帰国させなければならず、援助協力⁶¹を日本政府に求めて、1918年10月12日から11月24日まで日本に滞在中、行動を共にし、一兵士として尊敬の眼差しを向ける。「10月19日午後、赤十字病院で亡くなった兵士、カレル・クニトルの葬儀が厳かに執り行われた。赤十字病院では傷を負った仲間、回復期にある仲間が何十人と治療を受けている。⁶² シュテファーニクはこの葬式で私たちの存在意義をできるだけ雄弁に伝えられるよう、全て取り計らってくれた。私たちは葬儀が執り行われる小さなチャペルがある麻布に出かけた。各国大使や駐在武官の方々、日本海軍代表、日本国参謀本部代表、陸軍省、ロシア赤十字の婦人方、そして病院でお世話になっている私たちが参加した。伊藤男爵夫人がお嬢さんと歌ってくださった。墓地ではシュテファーニクが心温まる弔辞を読んだ。棺は日本の旗とチェコスロバキアの旗で覆われていた。⁶³」

最後にゼメクは日本滞在中にチェコスロバキア軍団が起こしてしまった事件を書いている。二人の兵士が酷く酔っぱらったのだが、その時の行動が日本人のチェコスロバキア軍団のイメージを悪化させないよう、その二人の兵士の内の一人はウラジオストクに戻された。何年にも渡る戦闘生活の後、異国にて普段の生活感覚を取り戻せないだけでなく、男性的なりビドーを抑えきれずに日本女性と付き合いってしまった兵士は少なくなかった。女性との関係で行き過ぎを告発されるものもいた。当時、軍の中では、結婚するときに上司の許しを得る決まりだったので、イジが彼のチェコ人の上官にお雪との恋を打ち明けると、上司はこう答える。

「言えることは一言だ。ウラジオストク！」

ロシアで発行されたチェコスロバキア軍団の風刺新聞の『ハウパチキ (Houpačky)』の1919年11月号には、「同盟国人と親しい(日本滞在の)第8部隊」と、多少の嫌味と嫉

⁵⁹ ゼメクは新聞アノネに詩を何作か投稿した：“Pozdrav Praze”, *Ano ne*, n° 1, 10. 1. 1919, p.3 (裏表両面で1頁と数えているため、実際には5頁から6頁にあたる); “Ta Miss Frazer”, *Ano ne*, n° 2, leden 1919, p. 1; “Dai butsu”, *Ano ne*, n° 4, 31. 1. 1919, p. 1-2.

⁶⁰ “Kronika”, *Ano ne*, n° 2, leden 1919, p. 8.

⁶¹ シュテファーニク(1880-1919)参考文献: Susumu Nagayo, “Nové poznatky z pobytu Milana Rastislava Štefánika v Japonsku (Október-november 1918)”, *Historický časopis*, n° 1, 2008, p. 137-145; ヤーンユリー・チェク, 彗星と飛行機と幻の祖国と—ミラン・ラスチスラウ・シュテファーニクの生涯、東京、成文社、2015年出版。

⁶² ゼメクによると約60人ほどのチェコスロバキア軍団が治療を受けていた: *O Juki San*, *op. cit.*, p. 122.

⁶³ Ferdinand Pišecký, *Generál M. R. Štefánik*, Praha, Svaz národního obrození, 1929, p. 99.



妬を交えた風刺が載った。絵は、もちろん、日本風茶屋の暗い片隅で芸者とキスするチェコスロバキア軍団第八部隊隊員だ。⁶⁴

チェコスロバキアがオーストリア帝国から独立⁶⁵したのは第一次世界大戦中のチェコスロバキア軍団の三国協商側への寄与が大きかったことが主な理由だったから、チェコスロバキア軍団はチェコスロバキア建国のシンボルとなった。そ

の軍団が伝える日本のイメージは、チェコスロバキア人の軍団への愛着とともに、長期に渡ってチェコ人に影響した。軍団を力強く援助した日本に対しても強い親近感を持った。実際には、チェコスロバキア軍団の兵士と日本兵の関係はいつでも良好という訳にはいかなかったし、チェコスロバキア軍団にとって早期の帰国が目標だったのに対し、大陸への影響拡大を目的とする日本との間には、いざこざも少なくなかった。チェコスロバキア兵の中には、チェコスロバキア軍団救出の大義名分の下に軍事的目論見を隠す日本を糾弾するチェコスロバキア兵もいた。シベリアでは両国の兵の間で戦闘も起こっている。⁶⁶しかし、ゼメクは強く理想化された日本のイメージをチェコ人に伝えることを選んだ。それには、長く辛い戦いの間に受けた日本の援助への感謝の気持ちが強く表れている。まず、勇敢な日本軍の姿。「力も尽き果て、何万という酷い蚊に苦しめられながら、タイガの湿地の中で約束された援助を待ち続ける。そして、彼らは来た。耳が割れるほどの雄叫びが響くと、日本人が力強い攻撃を始め、彼らが勝利した。日本の歩兵の勇敢な攻撃は、包囲されて危険な状態にあった私の部隊を救った

⁶⁴ “8. pluk v těsných stycích se spojenci”, *Houpačky*, n° 5, listopad 1919, p. 7. 新聞『*Houpačky*』について参考文献: Vincenc Červinka, *Sibiřské děje a postavy*, Praha, Český čtenář, 1921, p. 191-192.

⁶⁵ 一躍、建国のシンボルとして英雄になったチェコスロバキア軍団だったが、帰国後の世論は厳しいものだった。国民の大多数がオーストリア帝国軍として戦ったチェコスロバキアでは、軍団の存在は自分たち自身の祖国への裏切りを感じさせるといふ、少々、身勝手な理由から敬遠された。その後、第二次世界大戦中はナチスから危険な反抗分子と見なされた。終戦後も共産党独裁主義政権下では共産党が建国に導いたというシナリオの下、元軍団兵を社会的から抹殺する政策が取られた。公的な書面やスピーチからもチェコスロバキア軍団の文字が消されたのみならず、元軍団兵は拷問に掛けられ、強制労働所に送られた。この政策は、特に1950年代から1960年代にかけては厳しいものだった。参照: Jan Michl, *Legionáři a Československo*, Praha, Naše vojsko, 2009.

⁶⁶ 記事、『後列にて』(V zadním voji)の中で、ヨゼフ・キンツル(Josef Kyncl)は次のように書いている: 「私たちの車両では、日本人に付いて意見が大いに飛び交った。大陸の東側やソビエトの人々について、絶対的なもの言いをすれば、日本人の内政干渉的政策と不当な搾取を批難した(中略)。」“Ve voze máme velké debaty o Japoncích a východní otázce i o Sovětech: všeobecně odsuzujeme intervenční a uchvatitelskou politiku Japonců (...)” in Adolf Zeman, *Cestami odboje. Jak žily a kudy táhly československé legie*, Praha, Pokrok, 1928, p. 566. 参考文献: František Šteidler, *Návrat československých legií kolem světa do vlasti*, Praha, Památník odboje, 1921, p. 6; Daniel Lochman, “Chaljarský incident aneb Českoslováci a Japonci na Sibíři”, *Historie a vojenství*, n° 4, 2009, p. 47-53; Jiří Ludvíček ed., *Z Vizovic kolem kontinentu. Příběh legionáře Josefa Sulíčka*, Vizovice, Město Vizovice, 2010, p. 62.

のです」、「ここにこうやって座って、あなたとお話できるのも、あなた方の兵士のお陰です。67」と、イジは池田に語る。イジは、シベリアでイラナキ大佐に、ウラジオストクでは加藤寛治提督に助けられたことに感謝する。日本兵のことは「危険をものともせず、勇敢で、戦闘では常に勝利していた」ので、「魔法のような」効果をもたらした68と褒める。イジは、豊臣秀吉を例に取り、カエサルやナポレオンと比較する。治療を受けた際の「細やかで心温まるお世話を、私は生涯忘れない」と、イジは東京の聖路加国際病院院長に礼を言う際にも、「そして、もちろん平時においても日本軍から受けた援助は忘れません」と忘れずに付け足す。実際、チェコスロバキア軍団の日本への感謝の気持ちは、日本滞在中、常に日本の秘密警察に見張られていたことなど、どうしてもよく思わせるほど強いものだった。常に見張られるのは、チェコ兵にとって気持ちの良いものではなかったが、例えチェコスロバキア人がオーストリア帝国からの独立を要求していたとしても、日本の敵国のオーストリア＝ハンガリー帝国の兵士であることには変わらないのだから、日本が見張ったのは当然のことだった69。

人となりも、他の国民については批判的に書くことが多いのに対し、日本人については、他の国は日本の足元にも及ばないと言う。ウラジオストクで過去の偉大な中国文化の片鱗を目にし、白人や日本人の征服者然とした態度に中国人を感じる嫌悪感を正当だと同情し、また、中国の日本文化への多大な影響を理解した後でも、中国人をヨーロッパ文明の受容において「奇形」で不器用で、彼らの芸術を「変だ」と言い切る70。アメリカ人は日本人に高圧的でヤンキーだと気に入らず、チェコスロバキア軍団を助けなかったと非難する71。イジにとっての日本人は、一番気持ちの良い人たちで、勤勉できちんとした国民だ。そして、楠木正成を例にその忠誠心を褒め称える。それだけでなく、教養も高いと繰り返し評価する。イジが出会った日本人の殆どは文学に夢中で、何ヶ国語も操る。ロシア語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、そして時にはチェコ語も話す。一介の巡查ですらロシア語と英語を話し、愛読書はトルストイだ。看護婦の雪はシェイクスピアだけでなく、ミルトン、ダンテ、ゲーテも読んだ。当時のヨーロッパでは看護婦は医療機関で掃除や洗濯をする女中という認識が強く、ヨーロッパの古典文学に興味を持つ看護婦がいることは驚くべきことだった。ウラジオストクでは、まだ、日本人に対して尊敬と不信感がイジの中で共存しているが、日本に行くと尊敬の念が強まる。津軽から首都の東京への電車の中、日本の子供たちがチェコ兵の帽子の赤と白のリボンを見て集まり、可愛らしい声で「ナズダル」とチェコスロバキア軍団お決まりの挨拶の真似をしてみせる。不破駅に到着すると、役場のお偉方が出迎え、「チェコスロバキア軍団の兵士は戦地でともに戦った兄弟であります」とスピーチした。日本橋ではチェコスロバキア軍団兵を目にした日本兵が「チェコ万歳！」と叫び、7歳の息子と路を歩いていたもう一人の日本兵がチェコスロバキア軍団を見るために立ち止まり、驚くイジと握手するように子供を促す。

「挨拶をおし。チェコスロバキア軍団の方だ。」72

67 Oldřich Zemek, *O Juki San*, *op. cit.*, p. 28.

68 *Idem.*, p. 29.

69 *Idem.*, p. 204-205.

70 *Idem.*, p. 11.

71 *Idem.*, p. 89, 98, 150.

72 *Idem.*, p. 46.

日本はチェコスロバキア軍団に戦場をともにした仲間意識を抱き、国もないのに頑張るその姿に列強国相手に奮闘する自分たちの姿を重ねていたかもしれない。この頃の日本人のチェコスロバキア軍団に向けられた眼差しには、同盟を結んだ関係以上の親しみと尊敬の念を感じる。チェコスロバキア軍団救出を第一次世界大戦に参加する大義名分に掲げた日本では、チェコ人やスロバキア人に関心も高まったことだろう。中央ヨーロッパを専門とした学業も仕事もしていない池田は、チェコ語とチェコの歴史を知りたがり、1918年4月にチェコスロバキア初代大統領になる哲学者、トマーシュ・ガリグ＝マサリク⁷³が来日した際に面会することに成功し、池田の自宅に丸善で購入したというチェコの作曲家のベドジフ・スメタナの肖像画を掛け、読売新聞にスメタナについて記事まで執筆している。しかし、チェコスロバキア人に興味を持ち、親愛の情をみせる日本に接し、ゼメクの感情は、どう変化しただろう。

「わたし、気付きましたね」

と、イジは偉そうに日本を批評する。

「あなたたちは全てにおいてヨーロッパに追いつこうとしている。いや、追い抜かそうとさえしている。ごこちないにしろ、熱心に努力するその姿は尊敬しますよ。こんな短期間に中世的な社会から現存する文化の中でも最も近代的なものに変身したのは、他の国では見たことがありませんから。」⁷⁴

どことなくイジの焦りが見える。どこの国にも属せずに国力を増していく日本を前に、ハプスブルグ帝国に従わなければならない祖国を歯痒く思っているのだろうか。文化や文明に甲乙は付けられず、イジの発言には人種差別的なものを感じる。チェコ人はヨーロッパ文化をもたらす意味で日本人より格上だと言うことで、イジは心の中で日本とチェコの上下関係の均一を保とうと足掻く。しかし、この僻みを除けば、ゼメクにとって、チェコスロバキアと日本の両国は世界から認められるように努力し、尊敬し合い、支え合う国だ。横浜の国際パレードで海軍大将の加藤友三郎自ら「チェコスロバキア軍団に栄光を」と大声で呼びかけ、チェコスロバキア軍団もこれに日本語で「帝国万歳」と答える場面がある。ゼメクや他のチェコスロバキア兵の高揚感が伝わる。ウラジオストクで聞いた日本人提督の言葉がイジの心に蘇る。

「あなた方は勝たなければいけない。そして自由であれ。」⁷⁵

今、まさに誕生しようとしているチェコスロバキアはどのような国になるのか。チェコスロバキア建国のためにオーストリア軍から離れたチェコスロバキア軍団は、大きな期待と不安が入り混じった中で、故郷と自分たちの役割に付いて考えた。「チェコスロバキア人とはどんな方たちなのか、やっと分かりましたわ」と池田の妹が感激して大声で話し始めた時、イジはどんな気持ちで聞いただろう。

「分かっていたとしても。体育の先生の桜夫人がおっしゃっていました。日本の子供たちが敬い、きちんと御挨拶をしなくてはいけない英雄なのです。仕えるために生きることは、彼らにとって死ぬことなのです。そして祖国の自由のために死ぬことが生きると

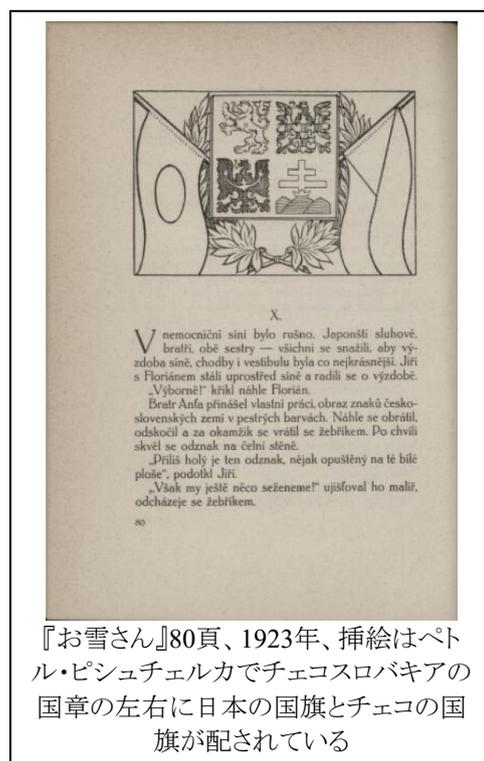
⁷³ マサリクの日本滞在の様子は、毎日のように報道された(参照：1918年4月15日付、1918年4月17日付、1948年4月19日付の朝日新聞)。他にも林 忠行著『中欧の分裂と統合—マサリクとチェコスロヴァキア建国』(中公新書、東京、1993年出版)、石川 達夫著『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』(偕成社、東京、1995年出版) 参照。

⁷⁴ Oldřich Zemek, *O Juki San, op. cit.*, p. 110.

⁷⁵ *Idem.*, p. 125.

ということなのです。今なら分かるわ。あの兵隊ごっこをしている子供たちが、なぜ、交互に「チェコスロバキア兵になる」と叫んでいるのかが。76」イジは日本とチェコスロバキアを比較して、両国には愛国心と、他の国を自由にするという徳があると云う。イジとカレルの二人の看護婦は、二人とも「チェコのお侍さん」77の恋人で、池田が言うには、日本の新聞もチェコスロバキア兵の英雄的な行為を侍と比較し、チェコスロバキア兵は名誉を重んじる上に祖国のためになら自己犠牲を惜しまないと書いたそう。池田が侍の切腹を説明する箇所では、チェコスロバキアの読者はチェコスロバキア軍団の大佐、ヨゼフ・シュヴェツの自殺を連想したろう78。

1918年10月、シュヴェツ大佐が、ブズルク・ブルマ間においてシベリア鉄道の線路の向こう側までボルシェビキを追いやる命令を受けた時、シュベツの部隊にいた共産主義支持者が戦わないように仲間を説得したため、部隊は命令を聞こうとしなかった。シュベツはその責任をとって自殺する。シュベツの死にショックを受けたチェコスロバキア軍団兵は、一度は拒否した命令を執行してボルシェビキを追いやる。日本的とも言える話ではないだろうか。チェコと日本を比較する内に、イジは両国を同一視し始める。富士山とボヘミア建国神話の象徴のジープ山を比べ、日本の学校の運動会をチェコのスポーツの祭典のソコルのように言い、乃木希典をチェコの記者のカレル＝ハヴリーチェク・ボロフスキーと比べる。ボロフスキーはハプスブルグ家のボヘミア統治に対抗して戦い、愛国心と戦いのシンボルと考えられた人物だ。戦闘でぼろぼろになった軍服を脱ぎ、チェコスロバキア軍団が綺麗な日本の軍服を身に纏ったとき、チェコスロバキア兵は日本との一体感を感じる。チェコスロバキアが建国されてドイツが敗戦したため、敵国ではなくなったチェコ兵が日本軍から日本の軍服をもらう場面だ。他にも、チェコスロバキア人と日本人の精神性を混同するような記述は多い。池田は自分をプロテスタントだと言い、在日チェコ人建築家のレツルは転生を信じるようになる。イギリス国教会の終戦に感謝するミサにチェコスロバキア軍団が参加した時、祭壇の横にかかる様々な国の旗の中にチェコスロバキアの旗を見付け、イジは誇らしい気持ちになる。チェコと日本両国の戦いは、世界に認めてもらおうための一つの同じ戦いだと、日本と一つになれた幸福感に包まれたゼメクは、あれだけチェコスロバキア軍団内で糾弾する日本の領土拡張主義をも許す。そして日本とアメリカとの戦いは避けて通れないと語る。「確かに日本はアメリカと同じ海洋の権利を有する。そして東シベリアとモンゴルにおける日本の利権は、他の列強の侵略より自然なことだ。7千万



『お雪さん』80頁、1923年、挿絵はペトル・ピシュチェルカでチェコスロバキアの国章の左右に日本の国旗とチェコの国旗が配されている

76 *Idem.*, p. 113.

77 *Idem.*, p. 89.

78 参照：Karel Pichlík, Bohumír Klípa, Jitka Zabloudilová, *Českoslovenští legionáři 1914-1920*, Prague, Mladá fronta, 1996.

人の命を持つあなた方の国は、毎年約1千万人増えるのだから。でなければ、過剰な住民と彼らに必要なものを、どう、捻出するのです⁷⁹。」

池田が小学生のうちから軍事教育することに賞賛して、ユマニズムを実用的でない自滅的な哲学だと説明すると、イジは池田に賛同して、哲学者で真のユマニズム派のマサリクまでもが防衛は倫理義務だと言ったことを持ち出す。そして池田が徳川家康が「外国の植民地にならないよう気をつけるよう」⁸⁰言ったという話と、マサリクの「一番の守りは攻撃だ」⁸¹と言う言葉を支持するのを聞きながら、イジは目を瞑る。何世紀にも渡るオーストリア＝ハンガリー帝国の勢力下にあったチェコ人が、今、独立を手にしたことを考える。そして、日本は明治初期にこそ欧米の列強の圧力はあったけれども、何世紀にも渡って独立性を維持していて、19世紀の終わりからは大陸にまで進出していることを思う⁸²。これは、注目されもしない売れない作家が独自の見解を、主人公の口を借りて述べているだけではない。これと同じ日本の理想化と日本とチェコの同一視観を、ルドルフ・メデクにも見ることが出来る。メデクは、やはりチェコスロバキア軍団の元兵士だったが、ゼメクと違って文学的才能があった。メデクは1922年に日本人についてこう言っている。

「彼らは帝国主義者になるだろう。

しかし、彼らの国は小さく、美しくとも貧困と出生率の低下に悩み、そして山岳地帯ばかり。美しく肥沃な大地は、このシベリアにおいて未だ開拓されていない。ロシアの怠けた手は大地を耕さずに満州人や韓国人の財布に手を伸ばすほうがお気に入り。

アメリカは下から手を伸ばして、フィリピンとハワイ諸島を盗んでいった。その人口の72%は日本人だ。これは帝国主義ではないのか。これは文明か。宣教師と商人たちよ。

軍国主義者になるだろう、この東のプロイセン人は⁸³。

⁷⁹ *Idem.*, p. 97-98. 日露戦争での日本の活躍に驚いた欧米各国の反応がここでも見られる。例えば、1909年にハンガリーの劇作家で脚本家のメニヒオル・レンジェル (Melchior Lengyel) が書いた戯曲『台風』は、イギリス、アメリカを初め、欧米で大成功を収める。日本人スパイが登場するこの作品では、日本はジャポニズムの芸術的なイメージから離れ、実際により近いものに描かれた。

⁸⁰ *Idem.*, p. 95.

⁸¹ *Idem.*, p. 112.

⁸² 1918年のチェコスロバキア建国には非常に複雑な民族背景がある。当時、国家は基本的に共同の言語、歴史、境界線、民族、文化を持つものとされたが、チェコを国家として古代ボヘミア王国の境界線で区切るとすれば国民の20%をドイツ人が占めることになり、国際的に国家承認を得るのは難しかった。スロバキアでは長年ハンガリー王国統治下にあったカルパティア・ルテニア地方の問題が独立国家への路を阻んでいた。この地方にはウクライナ人とハンガリー人が多く、独自の言語を話した。チェコとスロバキアは、チェコスロバキアという新たな民族アイデンティティーを形成することで、国家承認上の統計的問題を解決し、カルパティア・ルテニア地方の独立国家設立は事実上不可能であったため、最終的に独立自治区としてチェコスロバキアへ編入された。しかし、ハンガリーはそれを許さず、チェコスロバキアとハンガリーとの間で軍部衝突に発展する。その知らせを受けて帰国を急いだチェコスロバキア軍団兵も多かった。また、カルパティア・ルテニアの自治権が実際に行使されるには1938年11月まで待たねばならず、その不満から高まった独立運動は弾圧された。1939年3月にカルパティア・ルテニアは独立宣言するものの、同時にナチス・ドイツとミュンヘン会談で密約を交わしたハンガリー軍が侵攻する。独立国家設立のための良策と思われたチェコスロバキア民族形成だが、両民族が統一民族としての意識を持つことはなく、1993年にチェコスロバキアは解体。チェコ共和国とスロバキア共和国に分離した。

⁸³ 1866年の普墺戦争と1870年の普仏戦争のあった19世紀後半の時代背景から



日本でのチェコスロバキア軍団兵
(František Lukeš, “Země vycházejícího slunce”, in Adolf Zeman, *Cestami odboje. Jak žily a kudy táhly československé legie*, Praha, Pokrok, 1928, p. 301から)

彼らは確かに軍を有する。これほどの金がかかるのであれば、良い軍を、勝てる軍を持つべきだ。大戦中の他の国々と同じように、ドイツ人に習ったと言うべきだろう。我々だってそうだ。プロイセン人になるか。美学を持ちすぎる日本人は、教師としてはどうだろう。プロイセン人になるには繊細過ぎでありフェルドヴェベル(ドイツ語で軍曹のこと、訳者注)的でない。彼らはヨーロッパの猿真

似ばかりする。

もちろん蒸気や電動の機械も持っている。けれどヨーロッパよりもっと質のいいのを。もっと良い線路、もっと良い市街電車、そしてヨーロッパやアメリカよりも良い電流を使っている。彼らは私たちが日本で学んだのと殆ど同じくらい私たちから学んだ。けれど私たちのものを改良し、発明し、私たちが彼らのビロードや布地、芸術の産業を真似することになる。

彼らはヨーロッパと世界にとって黄禍になるだろう。

中国を動員するかと問われたら、そうだと答える。しかし、そう、ドイツ人たちは、これは(日本が)武装する理由だと語るはずだ。ヨーロッパよ、怖気づくな。中国と日本の間には古くからの恨みがあるのだから。中国と日本の過去には未だ清算されていないものがある。一方は意見にせよ、気質にせよ、動作にせよ、島国特有の段取りの整え方があり、もう一方には大陸系のどっしりと動かず自分自身に満足している趣きがある。とにかくも、ヨーロッパよ、恐れるな。

(中略)その美しさ、絵のような美しさ、調和、きちんとした性格、企画精神、熱心さ、そして仕事、根気と名誉の心、信心、道徳精神、けれどこの国をけなすものは多い、不運な結末の国、息苦しいほどの人口密度とその生産性。そして、色々な面から、この民族は君たちの国に似ている。君たちの国も、誰も何も知らず、今でも永遠の敵の意地悪く捕食者的で理不尽な態度を乗り越え、地理も、歴史も、哲学も自然学にも無知な西洋化推進派の人々の裏切りと、友人だと言い寄る人々の賞賛の言葉は、屈辱的なヤギの糞だ。ところが見たまえ。英雄的な民族。君たちのようではないか。働き者でつつましい民族だ。君たちのように。君たち民族が、彼らからもっと勇敢であることを、無駄話をしなくなること、もっと清潔であること、もっと秩序を大事にすること、嫉妬を止め、狭い心を捨てることを学んでも、悪くない筈だ。⁸⁴

⁸⁴ Rudolf Medek, *Do nejkrásnější země*, op. cit., p. 48-49.

日本滞在中の全権をマサリクに任されたシュテファーニクは、ヴァーツラフ・ニェメツをチェコスロバキアの国立評議会の公式な代表者に立てた。現在の駐在武官にあたる(1918年11月8日の決議書より)。チェコスロバキア軍団の帰国を確かにするために、誕生したばかりのチェコスロバキアの初めての重要外交事案の一つと位置づけられた。1919年4月19日、ニェメツは日本政府により、初代在日チェコスロバキア公使代弁として認められる⁸⁵。1920年1月12日、駐仏大使だった松井慶四郎が日本政府を代表して初代駐日チェコスロバキア大使のカレル・ペルグレルを承認し、1920年4月14日、信任書が松井の手により、当時、皇太子であられた後の昭和天皇、裕仁親王殿下に届けられた。こうして今年で100周年を記念する日本とチェコスロバキアの外交が正式に始まった。⁸⁶チェコスロバキアがハンガリー＝オーストリア帝国からの独立と民主主義の獲得と、二つの政治・社会的転換を迎えた時、人々を魅了したテーマは、ここでも日本だった。

終わりに

チェコ文学の日本のイメージには2つの要素がある。一つは恍惚とした眼差しで語られる美化された日本。もう一つは日本を女性として擬人化したイメージだ。芸術やジャポニズムから引き継がれ、チェコスロバキア軍団もそのイメージを広めることに一役買った。このイメージはジャポニズムの流行が過ぎ去った現在でも根強く残る。第二次世界大戦後、冷戦時代に突入すると、日本とチェコスロバキアは、政治、経済、社会、全ての面において、交流は最小限のものとなった。しかし、ゼイエルやゼメクの日本観は、チェコ人の心に強く刻まれて人々を魅了し続けた。ジャポニズムの遺産は20世紀後半の最も偉大な詩人の一人と言われた独裁政権反体制派のズビニェク・ヘイダの作品にも見ることが出来る。

「シュテパーンスカー通りに行く 私の呪われた静脈 マゴールと会うとは⁸⁷ かれは軽くよめく どちらかと言うとかなりよめく 発見がまぶしくて 発見によると中国の詩人は 酔っ払いながら書くという 酒を飲んで完全に酔いつぶれながら 君は中国の詩人が 老人ばかりだと気付いたかい こうして 僕たちは中国の詩人についての知識を交換し合った けれども僕はずっと日本の女性を求めていた⁸⁸」

これは1995年に出版されたので共産党独裁政権が崩壊した後の作品だが、中国趣味を取り込んで発展したロココ時代からジャポニズムへの19世紀後半の転換期が、半世紀以上経っても人々の思想に影響していることが良く分かる。ヘイダが所有した美術作品は多かったが、19世紀の日本の主流浮世絵師の作品数枚は特別に大切にされた。そして、やはり日本は女性に擬人化されて恋の対象となる。ヘイダの詩の中に

⁸⁵ 元在日チェコ大使のカレル・ハラの1928年3月の日誌参照：“Přehled úřední činnosti z let 1918-1928”

⁸⁶ 1918年から1919年の間に日本の病院、または日本を出発したものの日本近郊の海上で亡くなった5人のチェコスロバキア軍団は青山霊園と唐津港近くの墓地に埋葬された。長年の雨風や地震と、チェコスロバキア共産党政府が政府方針から管理しなかったため、青山霊園のチェコスロバキア軍団の墓は損傷が激しかった。兵士の墓はカトリック府中墓地に移されていたことをチェコスロバキア共産党政権崩壊後の1999年に確認。2015年にチェコ共和国政府が新しい墓石を建てる。

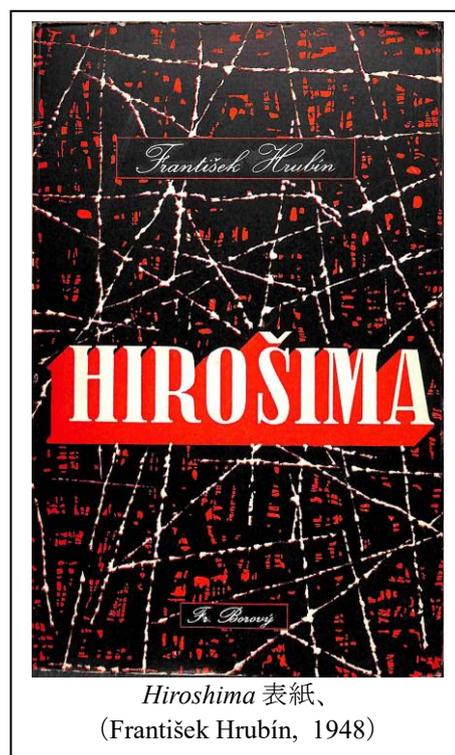
⁸⁷ 「Magor」は共産党独裁政権反対派の詩人、Ivan Martin Jirous (1944-2011)のこと

⁸⁸ Zbyněk Hejda, “Báseň, jejíž začátek se ztratil”, in *Básně*, Praha, Torst, 1996, p. 270.

は日本女性とのエロチックな夢が描かれたものもある。少し、面白いのは、抹茶が飲み物ではなくて伝統的な結婚式のお菓子として登場することだ⁸⁹。第二次世界大戦後にも関わらず、冷戦時代は入ってくる日本の情報は少なく、古い芸術的イメージの中の日本の固定観念に捉われ続けた。ヘイダを初め、知識人と芸術家は日本への憧憬を隠さないが、彼らを苦しめ続けたチェコスロバキアの共産党もその例外ではない。様々なスピーチでアメリカ帝国主義の「被害者」として日本が登場し、1945年から1952年までのアメリカの日本統治と原爆の批判は共産党のプロパガンダの常套句だった。1948年に出版したフランティšek・フルビンの詩集は『広島』と題名が付けられた⁹⁰。独裁政権下に公に出版されたということは、共産党のお墨付きだ。日本人女性とチェコ人男性の恋愛を基本とするメロドラマ調の日本のイメージも、共産党のプロパガンダ文学に出てくる。例えば、イジ・フロネクの小説、『横浜11.00』だ⁹¹。この小説で

はチェコ人女性のイヴァナが歌舞伎役者と恋に落ちる話で、日本の若い女性の描写は美しく、古き良き日本のノスタルジーに溢れている。まだ穢れを知らない女性のような古き良き日本こそ、これが正当な日本なのだと、「西ブロック」寄りの新しい日本の政策を批判する。

第二次世界大戦後、チェコスロバキアと日本の外交は1957年に正常化された。しかし、日本が新たに西欧を吸収していった戦後の時代は冷戦の時代だった。1989年にチェコスロバキア共産党独裁政権は崩壊したが、その頃には日本の西欧を知る欲求は満たされつつあった。新たに東欧を知ろうとする試みはあるものの、日本とチェコのお互いの芸術・文化分野での交流は多くない。両国の少ない接点は商業と科学の分野の一部に偏っているように見える。けれども、共産党独裁政権に迫害され、旧西側諸国では無名だったチェコの芸術家や知識人の作品が、近年ではヨーロッパにて広く認知されてきた。日本とチェコの文化交流の空白も、段々と埋められていくだろう。



Hiroshima 表紙、
(František Hrubín, 1948)

⁸⁹ Zbyněk Hejda, “Sen o Japoncích”, *Básně*, Praha, Torst, 1996, p. 206; “Japonec se vrátil”, in *Básně*, Praha, Torst, 1996, p. 208.

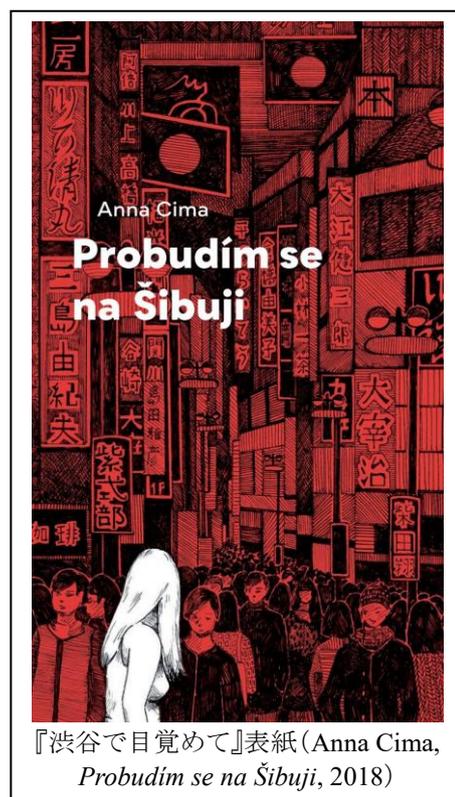
⁹⁰ František Hrubín, *Hirošima*, Praha, František Borový, 1948.

⁹¹ Jiří Hronek, *Jokohama 11.00*, Praha, Vyšehrad, 1973. 参照：Pavel Kořínek, “Socialistický žaponismus”, *A2*, n° 3, 2020, p. 5.

冷戦の厳しい時代にチェコスロバキアを訪れた日本の文化人は多くはないが、ここに幾人かの名前を挙げたい。作家の米原万里は日本共産党の父親に付いてプラハに1959年から1964年まで住んだ⁹²。劇作家の村井志摩子⁹³はプラハに1959年から1969年の10年間滞在し、初期は舞台監督のエミル・フランティシェク・ブリアンに興味を持った後、オトマル・クレイチャについても研究した。アニメーション作家の川本喜八郎は1963年から1964年の一年間、チェコのアニメーション作家のイジ・トルンカに師事した⁹⁴。

そして最後にチェコの現代作家のアナ・ツィマの小説、『渋谷で目覚めて』を紹介したい。ツィマは1991年、共産党独裁政権崩壊後に生まれた世代で、日本文化と現代日本文学を大学で専攻した⁹⁵。『渋谷で目覚めて』は発売されると同時に、チェコで大人気となった。日本が舞台でなくても、これだけの成功を収めただろうか。

独裁政権崩壊後の混乱も落ち着き、チェコでは直接日本で得た知識や、日本との活発な意見交換が求められている⁹⁶。チェコ文学の中の日本も、また、変わるだろう。



ジャン＝ギヤスパール・パーレニーチェク
(高松美織訳)

⁹² 米原 万里:ロシア語通訳者、翻訳家、執筆家。代表作に『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』(東京、角川書店、2001年出版)がある。

⁹³ 村井志摩子:チェコ留学から帰国後、ハヴェル、クンデラ、トポルなど、チェコの劇作家の作品を翻訳。村井の作品には日本で活躍したチェコ人建築家のヤン・レツルを題材にした戯曲もある:村井 志摩子,原爆ドーム、ヤン・レツル三部作—村井志摩子戯曲集、東京、テアトロ、1997年出版

⁹⁴参照:川本 喜八郎、『チェコ手紙&チェコ日記——人形アニメーションへの旅/魂を求めて』、東京、作品社、2015年出版

⁹⁵ Anna Cima, *Probudím se na Šibuji*, Praha, Paseka, 2018.

⁹⁶ チェコ国内で日本語・日本文化科のある高等教育機関(施設チェコ語名、日本語科設立年):科学院アジア研究所(Orientální ústav Akademie věd České republiky、1920年)、プラハ・カレル大学文学部極東アジア研究所日本科(Ústav asijských studií Filozofické fakulty Univerzity Karlovy、1948年)、オロモウツ・パラツキー大学文学部極東科(Katedra Dálného východu Filozofické fakulty Univerzity Palackého, Japanologie、1990年)、ブルノ・マサリク大学文学部日本科(Filozofická fakulta Masarykovy univerzity, Japanistika、2007年)